

家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育

第六十卷

第五号



5

日本幼稚園協会

KINDER-BOOK  
RECARD

新しい

園での保育に！ ご家庭に！

# レカード

新装

FA 2002 号  
“そらを とぶ”

FA 2001 号  
“かわいい  
どうぶつの  
うた”

LP 33 $\frac{1}{2}$ 回転・1枚・60円

フ レ ー ベ ル 館

- 61年型の  
スマートなレカード！
- 聞いて楽しく、みんなで遊べる、  
〈歌うカード〉としてご好評をい  
ただいてきました「キンダーブツ  
クのレカード」が長い間の経験と  
研究の結果、こんど新しい型に生  
まれ変わりました。
  - こんどは、とてもスマートです。
  - 音色も一流レコードと同じです。
  - 内容は、日々の保育に、またご家  
庭での団らんに最適のものです。
  - キンダーブックと併せてお聞きく  
ださると、楽しさが倍になります。

## 新作発表!! 新しい幼児の教育シリーズ

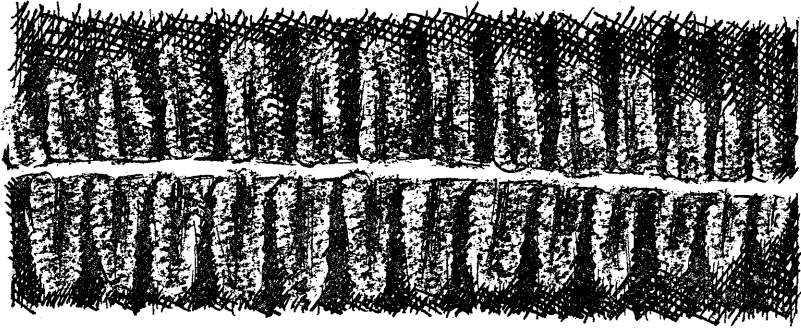


雨が降ったら
これ何の花？
こんなものまじいや
このお魚なあに？
ことりさん大好き
お月さまは生きてるの？
わたって大丈夫？

各巻 650円 (ライカ版)

東京都中央区日本橋茅場町3の14  
電話 (671) 2732 振替東京80183

三井芸術スライド社



幼児の教育 目次

第六十卷 五月号

表紙 岩崎ちひろ

児童心理と幼児の教育……………児玉 省(2)

随想 保育者雑感……………岩村安子(6)

ギリシアの夜……………藤田健治(7)

入園前の子どもの一日……………(9)

幼児の友人関係……………高桑康雄(25)

年少児のグループ指導(実践記録)……………森田礼子(29)

その土地が必要とするなら―仏教幼稚園のことども……………友松あきみち(32)

心理劇への招待(一)……………鈴木隆子・中村悦子(36)

実践記録を資料とした導入過程の研究……………今泉喜久子・本田和子(41)

つたのみ日記(その二)……………坂元彦太郎(49)

固定運動遊具のいろいろとその特徴および教育的意義③……………(52)

生活指導についての一考察……………石川春代(56)

ヨーロッパの旅……………平井信義(59)

日本幼児保育史の研究……………日本保育学会共同研究小委員会(63)



# 児童心理と幼児の教育

児 玉 省

筆者の与えられた「児童心理と幼児の教育」という課題について考えられることは、児童心理が幼児の教育においていかなる役割を演じつつあるか、または演じ得るか、ということと、さらに、幼児の教育をいかに児童の心理に直結すべきかという問題であろう。この三つの点は、相互に関連のあるものであるが、必ずしも同一ではない。現に、多くのことが幼児について分っていないながら、そのことが幼児の教育に必ずしも直結されていない。もっとそれがその教育のために使われていいのではないかと思う。

児童心理学の一つの面は、児童の心理の観察記述をすることである。これによって児童がいかなるものであるかを探さくし、確認する。そして、児童に対する理解が生まれる。また教育の任に当たっているものが、用いている意識的、無意識的、組織的、または無組織的方法に対する自己批判と評価もそのなかからおのずから生まれるであろう。しかしながら、児童心理の幼児の教育に対する使い方はこれで十分とはいえないし、これで終るべきではない。それは、幼児とはかくかくのものであるから、こういう教育をすべきである、こ

ういう方法を試みるがいい、という教育的方法についての積極的提案をもなすべきである。現実にはこういう提案もかなり行なわれていることは事実である。しかしこういう提案については、更にさらに多くの省察が行なわなければならないと思う。第一に考えなければならぬことは、幼児の教育についての児童心理の使い方が、しばしば断片的で総合性を欠如していることである。児童はかくかくのものであるからという取り上げ方がしばしば、児童の全体像を取り上げないで、断片的な枝葉末節的な取り上げ方をしがちであるということである。この表現は多少強すぎるが、傾向的にいえばこういうことになるであろう。第二の点は、児童心理を教育に使うに当たって、その使用が適切を欠き、または前後一貫性を欠くのは、幼児の教育についての教育理念が確立していないためである。教育理念は、勿論児童の心理の実体に結びついて、またはそれを基盤として展開されるべき面も多々あるけれども、それだけではない。児童の成長の究竟像が他の一面を提供し、またいいうまでもなくおとなの持つ価値観が残りの面を提供するであろう。ほかのことでいえば、おとなの持つ

ている組織的なものにせよ、そうでないにせよ、教育哲学に結びつくという意味である。

筆者はこういう観点から、児童心理が幼児の教育といかに結びつくべきか、あるいは、幼児の教育をいかに指向し、または教育理念にいかん奉仕し得るかの問題について考察を試みようとする。それはある意味では、児童心理の幼児の教育に対する応用であり、ほかの角度からは、児童心理が幼児の教育の問題に与える指向的役割である。以下与えられた紙数内で、先輩たちの知見や教育理念に支えられながら、試みた筆者が自分自身に与える答えである。

青年も少年の場合もそうであるが、幼児の教育は、先ず人間の基本的欲求を無視して行なわれることはない。むしろその基本的欲求に立脚し、または基本的欲求に乗ってこそ、適切な教育が行なわれ得るのである。基本的欲求が何々を指すかは、学者によって多少の意見のちがひがあるが、一応多くの人達が認めているものとしては次のようなものがあげられるであろう。(1)支配の欲求または達成の欲求。自分の意志の実現を希望し、または自分のしていることの達成への希望。(2)愛情の欲求。または安全感の欲求。(3)好奇の欲求。(4)所属または同調の欲求。(5)社会的認知の欲求。(6)身体的欲求。いまいちいちこれらの欲求の内容について説明を試みないが、これらの欲求は幼児の行動の源泉またはその推進力となっていると考えべきであろう。したがって、これらの欲求を無視して、幼児の教育を考えることは、先ずあつてはならないことである。

紙数の関係上、前述したことと次に述べることとの論理的関連に

ついて十分に考察することをさけるが、次に述べることは、幼児とはいかなるものか？そして、幼児がかくかくのものであれば、その教育的措置はかくありたいという意味の実際的提案をふくむものである。考察上の暗示はかつて読んだ多くの人々の意見に負うものであるが、とくにジョン・デウイ、ジョン・アンダソン、アブデグラフ、モンテッソリイなどに負うところが多い。

#### (1) 幼児は積極的に活動する

子どもは活動的で、好奇的で、自分からそこらにあるものを探しまわり、さわってみて操作してみる。眼にふれて、手の届くものであれば、なんでもつついてみる。自分からしげきを求め、そのしげきに応じて行動し、さらにしげきを求める。幼児といつても、二歳ごろから五く六歳ごろまであるわけで、二歳児と五く六歳児を同じように取り扱うわけにはいかないが、大体において同一傾向がその特徴である。

#### (2) 幼児はしげきに依存する

幼児は環境のしげきに最も多く引きずり廻される。前述したように、人間だれにでも好奇の欲求はあるが、幼児はとくに環境の事物、新しいもの、新しい感覚的経験——見たり、聞いたり、さわったり、味わったりなど——に引きつけられる。幼児はしゅん間に生きていく、といつていいほど、その周囲の事物に引きつけられて、その興味や注意が浮動している。注意の持続時間は短かく、集中を続けさせることがむずかしい。長い間一つのことを持続できるようにする能力、先を見とおして計画できるようにする能力は、年とと

もに徐々に発達してくるものである。

この性質のゆえに、幼児を何か一つのことにしぼりつけておくとか、最後までやりとげさせるためには、それをつづけ引っぱってゆくだけのしげき、しげきにおける変化を興えなければならぬ。

また幼児に何かの興味を植えて、それを展開させようとする時、その環境が子どもの興味を引っぱり出すように、環境を整備し、環境を操作することが必要である。また逆に、環境が余りにも多くのしげきを、無秩序に乱雑に与えている場合には、子どもの興味関心が散まらなくなりすぎる可能性がある。モンテッソリイが、幼児の運動の特徴は、放っておくと無秩序であることであるが、教育は、子どもの運動に「秩序」を与えてやることである。子どもの努力が現に向かっている方向へ、その運動を指向してやることである、と述べているのは、幼児のこの特徴をいかに取り扱うべきかについて彼のいっている主張である。一歳半〜二歳児に落ちついて集中することを求めることは無理であるとしても、四〜五歳児がいつもいらら動き廻ってばかりおるようではしょうがない。時に多少でも集中して何かができる時を持てるようにならなければならぬ。

ここでこの問題に関連する教育の課題は、どうすれば、無秩序になり易い幼児の活動性を組織できるか、また幼児の持久力をつくりあげる環境はいかなるものであるか、ということである。いうまでもなく幼児の興味がいつも外的しげきだけに左右されておったのでは、このことは不可能である。外からの号令のような指導だけで子

どもを動かしておったのでは、子どもの自発的な興味は展開しない。子どもが自分から進んで、自分の活動を集中するようになるためには、興味が子どもの内的な動機と結びつかなければならぬ。それは達成の欲求でも、社会的認知の欲求でも、好奇的欲求でもない。また幼児をさそってさせることが、そのしゅん間だけで終ることではなくて、毎日繰り返されること、または長くつづくものを包含することが必要である。草花や植木の世話でもいいし、何日かかって物をつくりあげることでもいい。

### (3) 幼児の行動は流動的である

前述したように、幼児はもっぱら外的しげきに依存して生活していることが多い関係上、その行動は当然流動的である。一つのことから次のことへ、一つの場面から次の場面へ、更にその次へと流動する。ここに不安定さがあるが、それは同時に柔軟性である。このまだ固まっていない状態は、子どもが新しい場面にでくわして、新しいやり方を身につけていくにつれて、徐々に固定して行くのである。この柔軟性の故に、おとなとちがって、一度できた悪い習慣でも学習方法でも矯正し易いが、同時に良いものでも失われ易い。子どもはしげきにひかれ欲求に推進せられて生活しているが、そのうちに、自分が生活している環境で自分がどういうことができるか、どういうことが最も興味をひくかを発見して、そこに子どものすることとしたがること、生活の傾向が徐々に形をととのえ固定して行くのである。

### (4) 幼児の社会的経験

子どもは前に述べたように、その環境に対して積極的に働きかけ、それをついて操作してみるし、また逆に環境からのしげきを求めるが、この環境のうち最も重要なものは人間である。というのは、彼の幸福の大部分は、彼がいかに自分の周囲の人、関係のある人々と接触し交渉を持つか、また逆に周囲の人々がいかに彼に対して接触するかにかかっているからである。

こういう対人関係、社会的経験は、適当な条件下においては、幼児期において驚くべき進歩を示すものであるが、このことはしばしば忘れられている。幼児が他の人々に接触する機会は、月に何百回にも及ぶであろう。ところが、その接触する人の種類、経験の種類及び数には、非常に個人差がある。ここに子どもによって社会的経験と社会的適応における大きい開きが生ずる原因がある。社会生活において無器用な人は、それは先天的な原因がないとは言えないが、むしろ多くは先天的な理由によらず、幼児期及び児童期における社会的経験の不足によることが多いとせられている。また幼児期において樹立される社会性的傾向は、かなり永続的傾向を有し、成長後の動向に影響することが多いのである。

それでは幼児期において与うべき経験は、いかなるものであることが望ましいであろうか。それは片一方に偏らない、多くの種類の、幅の広い社会生活の種類であることが望ましい。面と面と親しく向かいあって接触し話し合う経験、それも対おとなとの関係及び子ども同志の関係、小グループの社会生活の経験、大きいグループの経験。それも誰れかの手で統制せられているグループから、自分

らで自発的に行動しているグループの経験などいろいろな種類の社会生活であることが望ましい。子どもによると、大きいグループのなかでは平気であっても二人だけの、または数名の小人数のグループのなかでは固くなって、自由に楽な気持ちおれないような子どもがあるが、これはその社会生活の経験の幅が片よっていることによることが多い。おとなの手で世話をするグループだけに片よってもしけないことは、同じ理由による。

#### (5) 幼児の感情的安定の条件

おとなでもそうであるが、とくに幼児においては、その感情的安定は、環境とくに周囲の人との対人関係に対して寄せている信頼が安定しているかどうかということにかかっている。すなわち子どもの感情的安定は、環境に対する信頼のなかに生まれる。子どもが周囲の人を恐ろしがついたり、または時によつてちがった取り扱ひ、前後一貫しない取り扱いを受けていたのでは、環境の変化にもあそばれて、安定した態度や感情を持つことはできないであろう。安全感の欲求を満たしてやることが重要な理由はここにある。また安定した家庭の雰囲気、見なれたもの、親しみのある場面は、子どもにとって安定の港であつて、そこにこそ子どもは新奇なもの、未知のもの、不安なものへと発足する基地を見出すのである。よき環境とは、子どもに安定感を感じさせ、前後一貫せる特徴を持っているものである。同時に子どもに、行動の自由と、新しいことをしでかし、または新しいものを探求する自由を確保する環境である。

# 保育者雑感

岩村安子

ある日、突然玄関に訪れた立派な青年が「先生御対面です」とまじめな顔で私を見つめるので「えっ！ どなたでしたかね」と問い返すと「四十二年前置南坂幼稚園でお世話になりました小島元治です」「あっ！ 元ちゃん！ おもかげがありますよ」それから暫く物語りは尽きませんでした。私がお茶の水の保育実習科を出て二年後に結婚し、霊南坂幼稚園の創立に参与して、そこにお務めをした時第一回の卒業生として送り出したのが元ちゃんでした。弟さんと二人で通って来られたおとなしいお子さんでしたが、今は医博となられ関西で、婦人科医をしておられる由、打絶えて音信もお互にせず、全く思いがけない来訪に涙が出ました。御当人は上京したら一度あいたいと念願して、尋ねたずねて来られたことをきき、今更のように保育者の光栄を、し

みじみ味わいました。

倉橋先生が「保育者は、のれんにうで、おし、みたいなもので、一生けん命世話したお子さんも、道であうと知らん顔をし、成長すれば幼稚園の先生なんか忘れてしまったというふうなものですよ」と語られたことを思い出す。何も報いは望まない、お礼をいって貰うとは思わない、ただ保育した幼い者たちが立派に成長して世の中のお役に立ってもらいたいと祈りながら、日々の仕事に精を出す……そのようなものにも今日の喜びがあつたのだとうれしくなりました。

保育者として三十八年を過ごした者には、喜びも、悲しみも、困難にも、苦しみにも会つたといえましよう。殊に戦災による園舎焼失というような特殊な経験は、経営者としての苦心は並大抵ではありませんでした。三年間のプランクにおいて現在の「めぐみ幼稚園」を再開園出来た時、年ごとに卒業生のお子さんたちが入園してくる喜びを持っております。

それにしても、人生の最も大切な基礎といわれる幼児期を、一年二年三年と保育する責任の重大さを思います。朝な朝な嬉々

として集ってくる幼児の顔！ 何と愛らしく清らかなものでしょう。美しい自然の環境の中に、やさしく行き届いた先生方によって導かれる子どもたちは幸福そのものです。

智育に体育に情操教育に、心を砕いて日々の計画を立て、朝の礼拝に、リズム遊びに、お仕事に、団体のひとりとしての訓練をさずけながら、個性を生かした製作や、お遊びを通してよい人柄を形作る土台をすえてゆく楽しみは、保育者ならではの味わえない感激といえましよう。

今年もまた、多くの子ども達が園を巣立って、それぞれの学校にゆく、一人ひとりの前途には試験また試験と多難な道が待っておるでしょうが、園で培<sup>つ</sup>かれた「神をおそれ、人を愛する」心を忘れないで、何ものにも負けない意思の力と、お友だちと協力するやさしい心で、智能をみがきぐんぐん伸びていって欲しい。あなたがたの力で、明るいお国を作<sup>つ</sup>って下さいと祈りをこめ、小さい手に保育証書をうけとる子ども達を見守ります。(昭和三六・二・二五日)



## ギリシアの夜

藤田健治

アテナイの飛行場に着いたのは九月の終りの或る夕方であった。飛行場の建物から市までのバスに乘ろうと外へ出た時、すぐ向こうに真っ赤な夕日の下に見えたサロニカの海を忘れる事が出来ない。それは本当に南の海特有の重たい油のようにトロリとした海であった。ギリシアでは海はタラッタという。このことばは波打って跳る海を現わす美しいことばだが、しかしそれは決してサラサラした軽快さではなくて、ユッタリと重みのある事を感じさせる。その通りの実感なので市までのバスに乗ってからも飽かずに眺めたが、そのうち大きな赤い太陽は海に沈んだと思ったら、東の空に満月に近い月が出て、夏の夕方のように清々しかった。余り樹らしい樹のない道路を市に向かう間、往来に立って乗物待っているギリシア人を初めて見た。しかしこ

れはギリシア彫刻とは似もつかないイタリア人からも少し艶をなくしたような感じで、承知はしていたが少々失望した。ところがやがて正面遠くに近附いて来たアクロポリスの丘の上のバルテノンが眼にはいつた時は、やはり我知らず深く心をうたれた。アクロポリスは丘というより山といった感じでアテナイ市のどこからも見える程高い。だから昔アテナイの外港ピレウスから丘の上に立ったアテナの神像が見えたというのも本当かも知れない。そしてバルテノンは何といつても世界中で最も美しい神殿の一つである。それが夕方の晴れた空にクッキリと白い輪廓を浮かび上らせていたのである。

しかし私がこれから話そうと思うのはアテナイの事ではなくて、それからペロポネソス半島をバスで三時間ほど南下したミュケネの事である。ミュケネは例の自叙伝（日本訳名 古代への情熱）で名高いシュリーマンが発掘した俗称アガメムノンの城や墓のある所である。大きな岩山の上に二頭の獅子が両側から爪立って背のびした姿の彫つてある三角形の一枚岩を頂いて左右も

同じ一枚岩で出来た城門をはいり坂道を登りつめて城塞の遺跡に立つと、あたり一帯の平野が脚下に俯瞰され、遠くトロイア遠征に船出したと思われる海までかすんで見える雄大な城である。この地下の墓を掘つて出たものがアテナイの博物館にミュケネ文化の代表的なものとして陳列されている黄金の仮面やコップやダイヤモンドの燦然たる遺品である。城から少し離れて二つの蜂の巢形という円形のお墓がある。中は石で畳んだ円い四、五十人はいれる位な広さである。シュリーマンは前の城塞の中のお墓はアガメムノンのものだと思つていたし、後のものは一般にその父アトレウスの宝庫だといわれているが、いずれもそのままに受け取り難い。寧ろおそらくはもっと古い紀元前十五、六世紀の頃からのものと推定される。

ところでギリシアの風物は必ずしも豊かであるとは云い難い。山は砂礫と岩肌のみらわな禿山が多くて、さすがデルフィあたりの谷は美しいオリヴの森で蔽われているが、大体は薙にまばらな緑が見えるだけの場合が多く、全体として薄茶色の荒涼と

したものである。ミュケネまでの山また山のバス道路はよく通じており城塞自体もよく発掘整理されているが、その辺一帯は大體こうした景観で、その中をソダをつんだウサギ馬を追ったり、同じ馬に引かせた荷車に乗ったりしている僅かな数の貧しい男女に時折逢うだけである。話はそういうミュケネでの事である。

何年前か前ギリシア駐在のイギリスの外交官が文豪ハックスレー（だったと思う、間違つたらごめんさい）を案内してミュケネ見物に来て一晩その宿舎に泊つた。生憎その日は日の暮れから雨でそれに風まで加わつて、夜の眠りはまだかでなかつた。二人は淋しい環境の淋しい宿舎でその日みたミュケネの太古の遺跡が頭を去らず、遙か遠い昔のギリシアの英雄時代の戦争や血なまぐさいお家騒動や暗殺などを考えるともなく思い出していた。するとこの闇夜のしかも激しい雨風の中を宿舎の入口をトン、トン、トンとたたく音がする。そしてやがてかすれた声でユックリと間のびのびのした一音一音きつたように訪ずれるのが聞こえて来た。何とそれはア・ガ・ム・ノン

と聞こえるではないか。二人はゾツとしてベットの上につき上つて青い顔を見あわせた。するとまたトン、トンと音がしてア・ガ・ム・ノンとそれこそ今日見た暗い墓から出て来た亡霊のように訪なう声が嵐の中から幾度か途切れ途切れに聞こえて来たのである。二人がベットの中にもぐりこんで頭から掛布を冠つたのはもとよりであつた。

あくる朝さして来た太陽の光の中できいた話はゆうべの嵐の中では正反対に朗らかな笑に終るものであつた。シュリーマンはミュケネの発掘の間中そこに長く留まつて村人達の尊敬を一身にあつめた。その辺の村で子どもが生まれると彼はその名付親に懇望された。シュリーマンはそのギリシアに寄せた限りない情熱から、これらギリシア人にその偉大なる民族の子孫である事を自覚させるため（？）、イリアスやオデッセイアに出て来る英雄や美妃の名をそれらの子ども達につけたのである。だからミュケネのあたりには泥だらけで鼻をたらしたアキレスやヘクターやヘレネが出来たわけである。宿舎の亭主はその頃シュリーマンに名付けられたひとりアガムノンと

いうミュケネの城主トロイア戦のギリシア方の総大将の名を貰っていた。しかし時はたつてシュリーマンも死にその頃の鼻たれが今は宿舎の亭主となつた。生来怠け者かバクチでもやったのか彼は借金をこしらえ家業も左前となつた。昨夜訪れたのはその貸主の借金の催促であつたという事である。

アテナイについた夜、政府のあるコンステイテューションの広場からちょっとはいつた横町の或るレストランで日本の外交官のTさんと卓をかこんでビールを呑みながら、私はこの話をきいた。何だかどこかできいたような話でもあり、私の記憶が間違いでなくてハックスレーならばどこかで書いていそつた話でもあつた。Tさんはレストランの往來越しに前の建物を指しながら、これが元のシュリーマンの家です。シュリーマンも、後が続かなくて、この家も今は身売りをして政府のものですといわれた。一代の情熱の発掘者シュリーマンにやらんだ話をきいた後で、私は月光をあびているベネチア風の外から見ても瀟洒な構えの家を見るときもなく見ていた。

# 入園前の子どもの一日



Tは今年の四月から幼稚園の二年保育の年少組に入園する子どもです。前号にTの幼稚園選択のことについて載せましたので、今度はTが入園する前の一日の生活を画いてみたいと思います。

ある日、T君のお宅に、二人の記録者が出かけました。そして三十分交替で記録したものを読み易くしたのがこの記録です。それとともに、Tの母親に、入園前のTの生活の特徴や、しつけ方について記していただきました。これも一しよにここに掲載しました。幼稚園に入園前の幼児の生活の中にあられる問題が、数多く提供されています。Tはのびのびとした元気のいい子で、Tの母は子どもに理解のある、しっかりした母親です。子どもによって生活は異なるでしょうが、また共通の問題も多くあるでしょう。

これから、Tが幼稚園の生活に入ってゆく過程をひきつづいてみてゆきたいと思います。きっと多くの考えさせられる問題が提出されるでしょう。

朝

記録者達が訪れた時Tは母と妹といっしょに朝食をしていた。

十時

T「こんにちは」とニコニコしながら母といっしょに玄関に出て来た。そしてすぐテーブルにもどって、スプーンを口に運んではいたが、記録者に気をとられて、何も食べていない。やがて隣の部屋から字あわせのカードを持って来て遊びはじめた。今日二度めの遊びである。Tは朝食の前に外で一あそびしていたのだった。

T「おかあさん、おかあさん、ぼくね、わわってやりたいけど、わわはどこにあるの？」

母「さあ、どこにあるかな。さがしてごらんなさい。」

T「わわ あるの。」

母「必ずあるわよ。」

T「あ あった、あった。」

母「つねおさん 並べるんだったら、左からっていったでしょう？」

「ここから並べてごらんなさい。」

T「こっち？」と母の方を見ながら、「つけるの？ はなすの？」という。

母「どっちでもいいわ。」

T「これ電車か？ バスか？」

母「そうね、どっちにも似てるわね。」と妹に食事させながら、いつもなら、Tの友達があそびに来るころなにと

母「たっちゃんは？ けんかしちゃったの？」とTにきく。

T「ちょっとはずかしいんだ。」と母によりそって、耳うちをする。

前日、やっぱり友達のだれかとききかいをしたらしい。Tはまた

カード遊びをはじめた。

T「おかあさん、これもとっちゃおうか?」といって、まだきり離

されていないカードをとり上げる。

母「ええ、いいわよ。あなたのだから、御自由に。」

Tは、あれこれカードをきりはなしていた。その中の一枚、

おし」というカードを手にとり

T「おかあさん、ぼ・おし、みてたらぼおしのおいが、足にき

ちゃった。」と母の方をみる。そのうちTは記録者のストップウ

ォッチに興味を示しはじめた。

T「それなにをするの? はかるんでしょう? ぼく二十貫キロだ

よ。」

母「二十キログラムよ。」

T「二十キログラム、おもたいよ。」

母「でもこれは、重さをはかるのではないのよ。見る時はちゃんと

お座りしてね。」

T「——。」

母「きたなくしないようにね。」

T「きたなくなったらふけばいいじゃない?」とTはストップウ

ォッチをじっと見ている。

T「時計はき、十二で一にかわるね。」

母「よく知ってるわね。」

T「だんだん、さしてくんだね。」

母「さあ、もうわかったでしょ、きたなくするとい

けないし……」

T「そういうふうになってるのか、なんだ。」

母「ありがと、して、おかえしして。」

T「どうもありがと。」と記録者に返しなが

T「カチカチッいっているけど何なの?」と尋ねる。

十時三十分

お兄さん

Tがストップウォッチをながめている間

妹「おんり、おんり。」といって、椅子にあがろうと

している。母はそれをみながら

母「なんでもおんり、おんりって……。」というどT

も妹の様子をみて

T「登るのにおんり、おんりっていうのね。」とわら

う。

◆◆◆◆

おやつのおせんべいを皆で食べているとき、妹

は両手におせんべいを持って食べていたが、Tは

これを見て、妹の傍に行き、

T「ちゃんとおいておけよ。」と妹の手からおせんべ

いをとりあげ、菓子器にもどす。妹はすぐ、菓子

器よりまたとる。妹は泣きそうになり、いっしょ

うけんめいである。

母「どうしたの?」

13:30	13時	12:30	12時	11:30	11時	10:30	10時	9:30	9時	8:30	8時	
食	手洗い 記録者の の会話	戸外での遊び	三輪車 畑の中の遊び ブランコ(妹といっしょ)	カード遊び その他	テレビ ビデオ	カード遊び、母との会話 ストップウォッチいじり	記録者到着	食	食事	戸外での 遊び	起床 身じたく	睡眠

T「だって二つもとるから、欲ばりだもの。」

しばらく食べていて、おせんべいものこり少なくなつて

母「もうきげましようね。」

T「イヤー イヤー。」

母「じゃ欲ばりさん。最後の一つを召し上がれ。」

Tは最後の一つを口にして、机にもたれながら、ウーン ウーン

とひとりごとをいしながら、椅子をゆすつている。いつもならも

う外に遊びに行っているのだが、今日は、友達に遊びに来ない

し、Tは、いささか、もてあましぎみになってきた。

外で、自転車の音がすることに、子どもが走ってくるような音が

きこえることに、Tは、とび出していったが、友達ではなかった

ので残念そうにもどつて来た。

いたずら

隣の部屋で、スツッカーズのバンドをふりまわしている。

T「おいしいもの食べたくなつちやつた。食べちゃうね。」

母「——。」

ふすまをあけて押し入れに入り上の方にしようとする。押し入れ

の上の方には、父の絵の道具がおいてあり、下には子どものおも

ちゃがおいてある。絵の具がおちそうよ。そこにのつて、よかつた

かしら？」

Tはおし入れより顔を出し、

T「やさしくいって。」と母をみる。

母「そこにのつてよかつたかしら？」と声をやわらかにしている。

Tは、ニヤニヤして出て来てふすまをしめ置の上  
に腹ばいになる。

◆◆◆

Tは古くなつた腕時計をいじりながら、丸椅子を

足で倒す。

母「あぶないわ。」

Tは時計のガラスを見ながら

T「これ、われたつていい？」

母「あぶないからだめ。」

T「片づけても？ クリーナーでやっても？」

母「クリーナーでやっても目に見えないのがあるか  
もしれないわ。」

Tは歌をうたいながら時計のねじをぬきながら、

T「これ古くなつちやつたのかな。」という。

母「あら、つねおさん、およしなさい。」

T「ブルー——。」といながらねじをもどす。

外で自転車の音がする。

母「たっちゃんかな。」

T「外さむいからいや、さむいんだい。」

母「じゃ、ジャンパーきたら。」

T「——。」

母のしつけ（おしっこ）

外で三輪車の走る音がする。

母「あつ、たっちゃんよ。」

19時	18時	17:30	17時	16:30	16時	15:30	15時	14:30	14時
夕食	テレビ 母との会話 記者との会話	テレビ 兄弟 遊び	家の中 反人 遊び	外で 友だち 遊ぶ	家の中で 母との遊び	戸外での ひとり遊び (待合)	友だち来訪 おやつ	ラン ソ	フ ビ
記録者 去									屋

Tは急いで玄関からのぞいてみる。

T「あついな。」

しかし、おっかけていけば、友達がみつかりそう。靴もはいた。その時、おしっこに行きたくなった。

T「お母さん とくべつでおしっこしたい。」

母「とくべつはだめよ。お母さん、ここでもしろうくしといてあげるからいつてらっしゃい。」と机の上のカードをみせて、Tに便所に行かせる。その間に母はカードを並べる。Tが出て来て、

T「どら？」とカードをのぞき込む。

T「こつちから読むの？」と左を指さす。

T「お・り・こ・う……。だれが？」と母の顔をみる。得意そうである。

T「ウ とくべつでなくしたから？」

母「そう。」

テレビ——十一時

T「今日はブルーウーじゃないの？」

母「今日は水曜日よ。」

T「それじゃ3（チャンネル）にしよう。ピノキオなの。」とテレビをつける。画面は高学年向け工科の学校放送で、紙で作った衣装の学習。終りに近く、仮装行列のよ

### 母の記録 ①

○妹について

T雄は「とみこ」とよぶ。

T雄と三歳五か月はなれている。生まれたては「赤ちゃんよかつたな。」

「可愛いね」とよろこんでいたが、この頃はそうもいかなかった。

夕食の後など二人でよく遊ぶ。

「おにごっこ」と「イナイナイバア」をいしょにしたような遊び、電車ごっこ、オモチャ箱に二人で入るといった遊びが主である。

キャッキョッ遊んでいると思うと、すれちがう瞬間に抱いて倒して背中を平手で叩く。

何で覚えるのかとにかく練習もしないでよくスムーズに行くものだと感じ、あきれてしまうが妹はヒーとなく。

「可哀相だからとみこちゃんおねんねさせましよいか」というと、「イヤーン遊ぶ」「とみこいじめたいんだ」ともいう。

昼間お天気がよければ、二人を庭に出すことにしている。いじめることもなく狭い庭の中を二人で歩き、妹がころぶとひざと手をはたいてやっている。

ある日

T雄「庭より外へ出したいな。」

母「どこかへ行ってしまうからここだけにしませう。」

T雄「とみこ、どこかへ行っちゃっていい

よ、そしたらかたづけなくていいですよ。」

(妹の出したオモチャを「赤ちゃんだから、お母さんと一しょに片付けてあげましようよ」といつもいうのを指しているらしい。

母「とみこちゃん、可愛いなの。」

T雄「ウン、朝おきた時は、可愛いけど、あとちょっと可愛い。」

母「ほら、ああやって歩いてるのをみていて可愛い？」

T雄「ウン、可愛い、やっぱり可愛い。」

まだ、ベットに入って寝ていた赤ちゃんの頃は可愛いと思ったのだらうが、いまや、食事も同じ、おやつも同じ、遊びも同じ友達として遊ぶのであろう、その上、トランプをしていればとりに来る、積木をやれば、こわしに来る、絵をかこうとすると、クレヨンをとりに来る(妹にも場所をきめて同じようにクレヨンと画用紙を与えてもやがて自分の場所があきて、お兄さんの椅子へ登ろうとする。)

そういうふうなのに可愛いと思えという方がムリなのかも知れない。今のうちは同じ仲間としての思いやりくらいにして、もう少し上手にT雄の妹に対する気持を、時々、とらえてやりたいと思う。

T雄の行為が「いじめる」といふことばに集約されてしまうが、非常に残酷でないかぎり、それがごく自然の行為の場合であるかも知れない。

うに進行している。Tはみながら

T「変な王子様だね。」とバンドを手持って器械体操のような動作をする。画面にはいろいろな紙の衣装をつけた小学生が登場する。

T「やー すごい の きゃあ、あれ。」

ビノキオが始まる。

テレビに合わせて首をふり手をふって歌う。

T「あんね。つまっちゃうの。ビノキオがわるい猫をつかまえたの。」と記録者に話す。画面に紙で作った波がうつっている。

T「あれ、紙でやっているんだよ。だって波ってああじゃないもの。」

椅子から落ちそうになり、机によりかかって、バンドをしゃぶり出す。画面にビノキオが出て来る。

T「あれがビノキオだよ。」と記録者にいう。

立ち上り、机の上に腹はいになってみる。足で椅子をさぐる。

水くみの場面になり音楽がなり出すと、ボンボンと足を壁にやる。ビノキオの番組がまた来週と終る。

T「また来週か。」とテレビの歌に合わせて歌う。

友達の家に行く——十二時

近所のNの母が来る。母はNの母と話している。Tは一人で、時計をいじったり、机に上ろうとしたりしているが、母にうながされて、Aの家にあそびに行く。

T「たっちゃん、たっちゃん、たっちゃん。」  
と呼ぶが、返事がない。るすらしい。

門にぶら下り、もう一度呼んでみる。

T「たっちゃん。」

T「じゃ、ここであそんでいようか。」とつぶやいて、道路においてあった三輪車にかけよって、走り出す。しばらく、三輪車であそんでいたところ、背後よりAがやって来て、

A「つねおちゃんっ。」

T「はい。」

A「ぼく、遊ばないよ。」

T「いいよ。」

A「でも遊びたいんだ。」

T「じゃおいでよ。」

A「僕んちへ来れば?。」

T「ぼくんちがいいよ。」

と二人は、電柱のそばをとおりかかる。

Aは電柱に耳をつけ、

A「ねえ、何か鳴っているよ。」

T「知ってらい。」と云い、軽くAをぶつ。

A「じゃ、もう遊ばないよ。」

T「いいよ。」

Aはそのまま家に入り、Tは添木の鉄線にぶら下がり、  
T「たすけてくれよ。たすけてくれよ。」とひとりごとをいってあそんでいる。

しばらくの間、Tは石垣の上のぼったり、添木に足をかけた  
りしていたところ、

母親とNの母が話しながら、やって来る。

Tは母のところへとんで行き、母のそばで走りまわって遊ぶ。母から離れたたり、そばに近よったりをくり返していたが、母をみながらへいの方に走って行き、へいをボンボンと蹴る。

母「つねおさーん。」といいながら Tのところに来て

母「おてつだいしてちょうだい。玄関あけたままでしょう？ かぎをしめてきてちょうだい。」とひそひそ声でいう。

T「はーい。」と走り出し、後をふり返ってT「そこにおいてよ。」と走って行く。

途中、道路においてあった三輪車にのって走る。そこにAがとおりかかる。

A「のっちゃんいけなよ。」

T「きのうはあそんでやるけど、今日はだめ。」と三輪車からおりて、家かけこむ。鍵をしめ、うらから出て来る。走って母のいる方へ行くが、母の姿がみえない。

T「どこにいったんだらう。おかあさーん。」母はNの家から出て来て、

母「はーい。おりこうさんね。よく出来たわね。つねおちゃんもおばちゃんのところへ

## 母の記録② Tの交友関係

父親が十時出勤なので、八時三十分ごろT雄も一しょに起きる。

洋服をきて、はみがきを終えるか終えないうちにAちゃんが「T雄ちゃん」と来る。

午前中

Aちゃん(三才〇か月)

食事前一時間ほど遊び、食事後午前中一ぱいはAちゃんと遊ぶ。主な遊びは三輪車を二つ並べて競走のような形でAちゃんの家からT雄の家までを往復する。

疲れるとAちゃんの家でオモチャで遊ぶ。家でテレビをみる事もある。

(十時五分から①「お母さんと一しょ。」十一時から③「幼児向」その間に⑩「うたうえほん」や「元氣いっばい」等)

Aちゃんと遊ばない時は庭で妹と遊ぶ。

午後

一時間くらいAちゃんと遊んでいる。

N子ちゃん(六才〇か月)

幼稚園の帰りT雄のところによつて「注服をきかえているから家にいらっしやいね。」といつて行く時もある。

N子ちゃんの家は六百坪の畠あり、木立をまいたところ、芽の出ているところは入ってはいけませんが、木にのぼってもいいし、

大きな穴はふきいであって危なくないようにしてある。

N子ちゃんの家は、男の子が多く集まった時は(小学一年二名、三年一名、T雄、A、N子)オニゴッコ、家の廻りを一周して来る、畠の竹の棒をぬいてチャンバラをする。

女の子が多く集まった時は(小学一年一名、幼稚園二名、T雄)家の中で絵をかいたり、オモチャで遊ぶ。外で遊ぶ時は、花を一ぱい頭にまきちらしたり、葉っぱを背中にさしたり女の子は天使がおすき。竹の棒を十字にくんでお祈りしたりする。

M子ちゃん(五才五か月)

有名なカソリックの学校の附属幼稚園に通っている。水曜の午後ピアノ、土曜日に絵の先生のところに行く以外は家の中で弟と遊んでいる。毎日絵を書いたり、ピアノをひいたりして遊ぶ、一週に一度くらいお友達をお招きして(H子ちゃんだけ)家の中で遊ぶ。

T雄と遊ぶのはたまにこちらが窓にいて、あちらが庭におりているとき、「遊ぼうか」という相談をして、それぞれの母親に許しを得て遊ぶ。その他、夏休みとか冬休みとか長いお休みの真ん中の数日である。というのは、T雄と遊ぶとどうしても遊びが活発になる。ブランコも普通にのつ



来る？」Tはのこっている旨をつける。

Tはひとりで、石なげをしてあそぶ。

T「ピッチャー投げました。」

しばらくして、石なげをやめ、Aの隣の家  
の石段をかけたぼつては、とびおりる。

庭で、Aの兄達（小学生。流感のため休  
校）があそんでいる。

T「仲間にしてくれないんだもの。」と時々庭  
の中の子どもの達をあそびをちらとのぞく。

Aの兄達はあそびをやめて、石段をとおり  
かかる。Tや記録者を見て、

子ども達「こんにちは。」と、大通りの  
角を曲って行く。Tはちよつと隠れ、みな

が通り過ぎたら、出てきて、  
T「なんだ、いっちゃった。」とつまらなくな  
ってしまつたのか

T「お母さんどうしたのかな。行つてこよ  
う。」と走って行く。母は、Nの母とNの家の  
縁にこしをかけて話している。縁の前には  
庭につづいた広々とした島がある。

T「おかあさん。おかあさん。この中（島）  
に入っている？」母親うなづく。

Tは広い島の中で黒いつやのある石を投げ  
ては走ってひろいに行く。玉がどこかに行

て静かにゆずるのではない。支えている鉄  
の柱の上ののつてしまふ。T雄がのぼると  
Mちゃんものぼる。

「あんまり元氣すぎちゃうと、幼稚園へ行  
つてから三日から」とおっしゃって幼稚園  
へ行く二、三日前から遊ばないのである。

お正月、誕生日、おひなさま、クリスマ  
スは、お互いに外出着にきかえて、よんだ  
りよべれたりする。これは親たちも一しょ  
である。

Hちゃん（後に述べる）

以上の子どもたちは、先方の母親と何ら  
かの形で接触している。

Aの母 道であつて一般的な話をする。  
N子の母 N子の母に手芸を教わり、私が

最近よんだ本の話をする。またN子やT雄  
の扱い方で話を交換する。だから近所の母  
親の中でN子の母が私どもの子どもへの対  
し方を一番よく知っている。N子が問題を

おこすと私に相談にみえて、二人で一しょ  
に考える。

H子の母 道であつてもお互いに立ちどま  
つていねいに黙礼するだけ。

M子の母 大家さんなので親どうしも親し  
くしている。正月、三月三日、五月五日、  
クリスマスは、家中で集まり、一しょに食  
事をとり、子どもは子ども同志、おとなど  
もおとなの話をする。

この他に、その子どもだけのつながりの  
友達が、（女の子二人、男の子七人）毎日  
ではないが時々「T雄ちゃん」と来る。

T雄の家の南側にある道をはさんで北側  
は門あり、垣根あり庭ありという家がつづ  
く。道をはさんで南側に少しいと、比較  
的小さな家なみで、雰囲気があるで違ふ。

小さな家だから云々ということは言えな  
い。T雄の家自体小さな小さな家である。

ただ、子どもへの親の対し方がちがうと  
いうのであろうか。道路でT雄くらの年  
令から、小学校三年生くらいの一団が遊ん  
でいる。

遊びそのものは健康だが、買いぐいをよ  
くする。お昼にパン屋から好きな菓子パン  
を一つか二つかって来て、家にも帰らずに  
たべている。

北側の子どもはそれをしない。

屋台をひいた「おでんや」「お好み焼や」  
はそれを知っているから、T雄の家の先の  
角を曲つて道の北側に入って来た事はな  
い。

北側と南側は一しょに遊ばない。

T雄は誰でも遊べるようにしたいの  
で、誘いに来てくれれば出かけるし、家に  
上つて遊んでもらう。

ってしまった。

T「黒い玉どこかに行っちゃった。」としばらく畠の中を走りまわってさがしていたが、みつからない。

T「おかあさん、おかあさん、ないの。」

母「——」。母はNの母と話しこんでいる。

T「おかあさん。さがしてってばあ。」

と大声でいう。母は話をやめ、Tに

母「玉ねぎとおはの間でしよう?」という。

T「ないよ。お母さんないよ。」

Nの母「おはのところでしょう?」

Tは走って行く。

母「おはふまないで。」

T「ちよっとおかあさん。そっちからみたんじゃわからないよ

——。」と畠の中を走りまわる。何も植えてないところに小さな大根

が一本ころがっている。

T「お母さん、ほら、大根がおっこっていたよ。」

T「ここさがしてもないよ!」

母「もってこちよ。」

T「ないよ!!」とTは相手にしてもらえないからか、おこってしまった。

った。

トランプ遊び——十四時

母「トランプでもしてお食事休みにしましょう。」

T「あの時計のは?」——彼は自発的に提案を試みた。——

母「あれならひとりできるでしょう?。」

### 母の記録③ 買い物について

皆が買い物をするので困った。まず、T雄の家ではどうして買わないのかを、衛生の面や、行儀の面でT雄に納得がいくように話した。そして「皆が何かを買いはじめたら、必らず家に戻っていらっしやい。」といった。

「三時にならなくてもおやつを必ずあげます。そうしたら、皆が買い始めると走って帰るようになった。「お母さん、皆はドンドン焼を買ってるよ。」という時は、お八つをドンドン焼にかえた。おつかいの帰りにちよっとみてきたりして中に入れるものも、エビ、サラシネギ、おいも等売っているのと同じにした。T雄は結構たのしいらしく、

「新聞紙につつんだのはゴミがついちゃうけどお皿は安心だね。」

おでんがたべたい時は、今日は「おでんにしてね。」というので煮ておく。

しかし、一文菓子屋へ自分で買いくという欲求は満たされない。そこで、有名メーカーのチューインガムと完全包装したビスケットやクラッカーならぞの店で買っていいことにし、ガマ口にお金を入れて首からかけ、バスケットに買うものと持たせた金額を書いて持たせてやった。何度かそうしていたある日、帰って来て、「お母んはいけないうけどばく、どうしてもアンズが買いたいんだよ。」

私がついてお菓子屋に行った。一袋五円という。ポリエチレンの二センチ幅の細長い袋に赤

黒いものが入っていて、二、三人の子どもがなめていた。

「お母さんが買ってあげます」と買ってあげた。帰って、

「どんなところで、どんなふうにして作っているかわからないし、バイ菌でも入っていたらたいへんだから、お母さんの見て

T「並らべてよ。」——並らべ方には自信がない。そこで母に応援を求めた。

(母に並らべてもらって時計遊びを始める。途中母がやり方のまちがいを正し、Tも時々母に質問する。ひとり言も活潑だ。)

T「13は……と、ああそうか、ここでござんした。めくってみますと6でした。それで6をめくりますと12でした。12は手が届かない、手のとどこかないところにやるのはやりにくいな。おばさまとって下さいな。」

(「下さいな」と頼まれては、記録者もいやとはいえなくなる。)

——終りに近く——

母「残念ながら13らしいわ。」

T「うわあー残念、おしまい!!」

母「折れ方でお母さんには13だつてわかっちゃうの。」

T「ねっ。」

(僕にもわかるんだという意思表示。首を傾けてニコッと笑う。) さて、記録者Aを加えて、母子と三人ではば抜きをする。Tは、ここにことカードをかける。

母「つねおさん、ごきげんね。」

「ごきげんのTは、母の手札が気にかかり、ついのぞき込みそうにもなる。

母「ずるは絶対にいけないのよ、見ちゃいけないわ。」といわれればのぞくわけにもゆかず、ひとり慎重の構えでゲームに熱中する。Tは真険な面持で母の手札を抜く。調子がよければつい歌も口ずさみたくなるもの。

いるところだべなさい。よその子があげるといっても絶対、ぼく、いらないうのよ。」お母さんの知らない間にたべたりしたらダメ。「お母さんは、そのアンス、おいしくないと思うけどなあ。」

T雄は半分ほどたべていたが

「お母さんのいう通り、変なお味!!」

それ以後、買えるものと、買えないものの自分の基準が出来たらしく、無理に買ってといわなくなった。

遊び友達も時々変る。いつしか北側のN子ちゃんの方になったので、おやつも、N子の家でいただいたり、T雄の家でたべたりして自分で買っていくという事もなくなつた。

たまに南側の子どもが袋にお菓子を入れてたべながら来ても、無関心でいる。

母は、「なるべくお家でたべていらっしやいね。何かたべたくなつたらT雄ちゃんの家であげますよ」という。

「お昼だからお家へ帰つたら」というと、

「さっきT雄ちゃんの家に来た時、パンをたべながらきたでしよう。あれがお昼だよ。」

といわれてびっくりする事もある。

南側の子どもたちと遊んでいるのを見るとN子はT雄に

N子「あなたなゼマッコたちと遊んだの」

T雄「だつてよびに来るんだもの」

N子「あんなにダメッていつたでしよ。」

T雄「どうしていけないの。」

N子「どうしても……しらない。」

などと話している。

T「ツァン・ツァン・チン・ツン・ツン……」

母に次いでTが上り。Tのごきげんも最高。

記A「うまいのね、どこにばばがあるのかわからなかったわ。」

T「今日は見つかるといけないからちがうとこみてた。」

ゲームも一段落、母と記録者はおとなの会話を始める。Tとしては、せっかく勝負がついたのにこれではもの足りない。

T「ね、しようよ。」と呼びかけ、母と記Aの手を取る。しつぺの催促である。

T「僕痛くなかった。」

T君満面笑みをたたえ、極めて満足のようす。

母のしつけ(その一)

トランプ遊びの途中、

T「お母さん お水欲しい。」

母「自分で飲んでいらっしやい。」

T君、台所にお水を飲みに行き、帰ってくる。ところが台所で水の音がする。

母「つねおさん、お水の音がしているわ、ちやんと止めていらっしやい。」

T「だってできないもの。」と一応云ってみる。

#### 母の記録④ けんか

けんかをするのはAちゃんとN子ちゃんが一番多い。

H子ちゃんとは一度もけんかをした事がない。H子ちゃんは、おそらく誰ともけんかをした事がないだろう。

南側の子どもたちとは、リーダーがあつて皆を遊ばせるという形なのでけんかをしない。(カケッコをさせるとか、陣とりをするとか)

Aちゃんと、

T雄「お母さん、ただいま。」

T雄「どうして帰って来たかわかる。」

母「けんかでしょ?」

T雄「そう」

母「どんなけんか?」

T雄「Aちゃんが桓根のところのぼったからぼくのぼったらダメっていうの」

こういう種類のけんかのくり返し。

N子ちゃんと。

玄関前でN子とゴシャゴシャやっている。N子がT雄をおしている。

T雄「お母さん」玄関に入って来てな

く。

らんなきい。」泣いていてしゃべらない。

(小さい声で)

「N子ちゃんがぶつの」

「どうしてかしら、T雄ちゃん」

(T雄は喋らない。自分が正しければ泣いて答えないはずはないから、T雄が悪いんだなと思う。

「じゃあN子さんにききましょう。」

N子は自分が正しいから、口を大きくあけて喋る。

「T雄ちゃんがね、N子のこと何もしないのに押したの。」

「そう?」

T雄かすかにうなづく。

「T雄ちゃんもそうだっていってるわ、今ちょっとあやまりづらいらしいから、私が代りに謝まるわ、ごめんなさい。」

「ウン」N子ちゃん帰る。

T雄は玄関がしまると母をみて笑った。しばらく入口にこしかけていたが、

「N子ちゃんどこいつてくる」

H子ちゃんも、弟さんもT雄とけんかをするくらいにあちらも積極的に遊んでくれるらいいのと思う。

母「もう一度やってごらんさい。それでできなかったらお母さんやってあげる。」

T君、台所に行く。水道は完全に止められたようす。

お友達とお三時

NとAが揃って来訪。Nは幼稚園女児、Aは4才男児。一同火鉢のまわりに座る。

母「どなたか、お玄関開けっばなしね。」

N「わたしじゃないわ。」

A「僕もちがう。」

母「つねおさん すみませんけれど閉めて来て下さる？ わるいわね。」

T君、ナイトとしてこの依頼を甘受し、戸を閉めてくる。

母「どうもありがとう。」

母のしつけ (その二)

ペンギン型の小さなバッグの中に一円貨がたくさん入っている。

待ちぼうけをくわされたT君家の中で妹と過す。一円貨を畳に散らし、妹の口の中に二、三枚を突っ込む。

母「いいことかしら。」T君、無関心を装う。

母「お母さんつねおさんのお口の中に入れてあげるわ。」とおせんべを割って入れてやる。妹の口にもおせんべを入れ、一円貨を出す。

待ちぼうけ

T、N、Aは揃ってH家の方に行く。H家の前でNはAと手をつなぎ、Tにはこんなことをいって家の中に入って行く。

N「つねおちゃん、待っててね。」

ひとり残されたT君、記録者につき当ってくる。中をのぞき込むが入ろうとはしない。5分程待つが音沙汰はない。

T「はやく出て来ないかな。」

T君、再び記録者を打ち、門をゆすり、へいぎわのゴミ箱にのり、

遂にはへいにのぼり、

すこぶる落ち着かない。

記B「なお子ちゃん

どうしたのって聞いてみたら？」

T「うん、呼んでみてよ。」

記B「でも、つねおさんのお友達でしょ。」

T「どろをつけちゃうぞ。」

この頃は友達とやるので、早く札がなく

なる方が勝ちという事がわかってきた。その他、神経衰弱、名あても一人で出来るようになり、シッペも覚えて来た。

T雄の家に友達が集まると大抵すべり台を出して遊ぶ。順番に、寝てすべったり、スーパーマンの形をしてすべったり、あらゆるすべり方をやる。やがてお家ゴッコをする。

四時近くになって妹の寝る時間になると、トランプやゲームなど坐って遊ぶのに変えるよう始めから約束してある。(家全体の震動がものすごいので。)

記B「大きな声で呼んでみたら？」

### 母の記録⑤ トランプ遊び

お友達にそれぞれ都合があつて遊ばない時は、妹と遊ぶ。三時すぎに妹が昼寝をする。母とトランプやゲームをする。母が仕事をしている時は、一人であそべるトランプを教えるのでそれをやるかマシィン・トイ (Machine Toy) をする。トランプは今年の正月からやり始めた。最初ババ抜きを教えた。一番先に札がなくなったら「もつとやってたかった。」「一番あとまでやりたいからジョーカーがぼくのところへくればいい。」と何度もいつていた。

T「なおおきさん、どうしたの？」と二度繰り返すが反応はない。

T「あのね、遊んでいたいんでしょ。ちょっとみてくるね。」

T君、庭の中に走って行き、N、A、Hがいたと報告し、記録者にも是非見るよう引つ張って行く。が障子が閉っけていて見えない。

T「きつとなおおきちゃん、ぼくと遊びたくないんだ。障子閉めちゃったもの。さっきは開いてたよ。」

Tは先に立って門を出、記録者をH家の内側に残したまま閉めてしまう。

T「このぼってこなくちゃだめ。」

豆腐屋さんが来合せてので戸を開けざるを得ない。T君は走り出して家に駆け込む。

T「お紅茶！」

母「飲むの？ はい、つねおさん。」

T「にがい、飲めないや。」

母「けんかしたの？」

T「遊んでくれないの。佐藤さんに入っちゃって出て来ないんだよ。おばあさんにおこられちゃうんだもの。」とT君は寝そべって足をばたばたする。

三輪車で遊ぶ——十六時三十分

A「つねおちゃんっ。」と呼びに来る。

T「なおおきちゃんもいる？」

A「ううん。」

T「外寒いもの、やめよ。」

母「たっちゃんひとりでしょ、行ってらっしゃいよ。」

T「いやだ。」という

ものの、家の中で遊ぶのもつまらなくなっているの

で、T君外に飛び出してゆく。Aは

三輪車の傍に立っている。T君、その三輪車に腰かけると、Aが後から

押してゆく。焼手屋さんの屋台を後から押しておもしろ

ろがったり、三輪車を思い切り走らせたりする。

T「たっちゃん、ぼくの赤い自転車、持って来てよね。」AはTの後について走るのみ。

T「あのさ、赤い自転車 どうした？ あったでしょ、ぼくの。」というわけで、AとTは走ってさがしに行く。

赤と青の三輪車と黒の子ども用二輪車の三台を板戸の前にならべて、

T「白バイに乗って行くか。」

A「僕も白バイに乗るの。」

二人は元気よく三輪車を走らせ、Aの家との間を往復する。時に

### 母の記録⑥ 手洗い、うがい

遊びから帰って来て、石鹸で手を洗うのとうがいをするのは、母にいわれなくてもやる。

母「お母さんおやつ」

T雄「ハイ」

たべはじめ。三口ほどたべて

T雄「アツたいへん、ウガイをするのを忘れた。」

母「もうたべちゃったからダメよ。いいわこの次からなさい。」

T雄「ダメだよお母さん、インフルエンザになっちゃうよォー」と泣きべそをかく。

母が洗いなさいというから洗うのではなく、インフルエンザに直接、恐怖を感じて

はAが転ろんだり、勢をつけて三輪車を乗り捨て、三輪車だけを走らせたりする。

T「どうとうおしっこしちゃお。」

A「ぼく、しないよ。」

Tはコンクリート塀におしっこをかける。

Aは細い露地に入り込み、Tの家の便所裏をのぞき込んで馳けもどる。

A「くさい、くさい。」

T「くさいか？ ちょっとためしてみよう。」

T君、Aの真似をして走って行く。

T「くさい、くさい。」

二人は小休止をし、道路を大きな子ども達が行きかかるとを眺める。

A「行こう、もう行こう。」

T「うん。」

三輪車を乗りまわしている時、近所の少女

(中一)が竹馬に乗って登場。

T「さちちゃんッ。」

少女「つねおちゃん、これ乗れよ。」

T君、竹馬をつきつけられて考えた。

T「乗れそうもないな。」

少女「乗れっこないじゃない。」

乗れないのが当り前と突き離される。傍にいたA、T君を誘う。

### 母の記録⑦

H子ちゃん(H子ちゃん六才〇か月、弟U夫ちゃん四才五か月)

T雄「お母さん、ぼくとN子ちゃんとHちゃんの家にいったら、おばあさんが出て来て、N子ちゃんが入ってもいいけど、

T雄ちゃんは乱暴だから入ってはダメ」って門をしめちゃったの。」

こんなことが二度つづいたので、私がHちゃんのお母さんをお願いにいった。

「どんな乱暴をしたのでしょうか。」

いつでも、他で遊ぶ時は、家で遊んでいるときにお母さんがしてはいけないといっている事はしちゃう。その他は自分で考えて悪いことではなかったら、遊びたいように遊んでいい。もしT雄のしていることが悪いことだったら、そこのお家のお母さんが、注意してくださるから、ちゃんとおっしゃることをきかなければいけないといつてありますので、注意して頂きますが大抵はやめると思うのでございますが、何としてもお宅のお子様と遊ばせたくないとお思いでしたら、T雄でなく、私におし

ゃって頂くと嬉しいのですが。

「あなたは乱暴だから」というのが何度かくり返されますと、自分は乱暴なんだと思

いこんでしまいます。悪いことをしたとき、一つ一つ直してやるときのT雄自身の

気持の上の障害になってしまいますから、Hちゃんのお母さんからは、T雄がど

んな遊びかたをして、どういふふう

に乱暴だったかは説明していただかなかった。

後日、離れたところのあるお母さんから「Hちゃん

とどこではHちゃんも(T雄より二才上)その弟さん

も(T雄と同年)おとなしくて、よそのお

子さんの遊ぶのをただ立って

みているというふうで、だから、T雄

ちゃんには元気がいいから、こわい」

っていうそうよ。『一しよにあそぶうよ』

ってT雄ちゃんが手をひっぱった

ら、ころんじやったんですって。」

ときいた。

H子ちゃんはそういう事があつてもT雄

と一しよに外で遊ぶ。H子ちゃんのお

ばあさんの姿がみえると、二人ともサツと

かくれるのだそうである。(T雄の話)H子

ちゃんの家

にH子ちゃんをよびにい

く時は(弟はめつたに遊びに出ない)門の外でT雄

がまっついで、外の人が中に入り、出

てくれば、一しよに遊ぶが、なかなか出

てこない時は一人で家に帰ってくる。メソメソ

したところはな

い。なかなか出てこないからおばあさんが

いらつしやったんでしょ。だから帰って

来た。」

H子ちゃんはT雄の家で遊んでいても、時々、T雄ちゃんの家で遊ぶとお

こられるからどうしようかなあ」といいながら、また遊ぶ。お母さんにおことわりしていらつしやい。そうすれば安心といわれるから。とい

いても「いけないといわれるから」困るから」と動かない。T雄の家でお三時

もたべることがあるが、帰って話さないらしい。

A「はい、行こうよ。」

TとAはAの家まで往復する。ここにもう一人かん乗り(空籠に  
ひもをつけて乗って遊ぶ)の少女(小四)が登場。

少女「これに乗れる?」

T「ぼくできるよ、そんなの。」

A「さあ、行こうよ。」Aの誘いに応じ、三輪車でかけ去る。

少女「ねえ、やれる?」

T「できるけどさ、今はだめ。」

少女「やってごらんよ、できないの?」

T君、不承々々罐を借りて乗ってみるが歩  
けないので靴を脱ぎ今一度試す。

少女「もっと速くやってごらん、できない  
の?」

T君、思ったようにできないのでいささか  
しょげている。

Aと二人で三輪車をぶつけ合いながら走  
る。

### 五時

T、A、玄関のところに来る。TはAにも  
一緒に家の中に入るよう誘う。

A「つねおちゃんちに入っついていいか、帰って  
聞いてくるね。」

T「僕も行く。」

二人でAの家に行き、馳けもどる。

T「靴下が下がっちゃった。」と母に上げてもらう。

T「この二人、ろうやに入れちゃおう。」と記録者二人のまわりを歩  
きまわる。

母「牢屋は悪い人を入れるところでしょう?

ろうやより素的なところに入れてあげたら?」

T「どんなところ?」

### 母の記録⑧ 夕方家に帰ってから

五時になるとT雄は帰って来る。(夏は  
六時)

家に友達が来ている時はサヨナラをす  
る。五時から、TVまんがのはじまる五時  
三十分まで、妹と遊びながら、食事の仕度  
をしている母に話しかける。

§1、その日にして来たこと

ほんとお母さんに言うとおこられるこ  
となんだけど、ぼくきょう水たべたんだよ。  
道におっこつてたんだ。チコちゃんとは  
く。

母「わあ、きたない。」

しんけんな顔をして、  
「でもぼく水でよくきれいに洗ったよ。」  
と力を入れて話す。

§2、いいいいことて人の前では話せない

話  
「お母さん。ほんとはいっちゃいけないこ  
とだけど、お母さんならいってもいい?」

「ええいいわ」  
「あそこのお母さん、いつも髪の毛がくし  
やくしやだね。」

「お母さん、ほんとはいっちゃいけないこ  
とだけど、ごめんないだけど、ナイショ」  
耳元で「お隣のおじちゃま、平凡太郎に  
似ているね。」

§3、きいてきた話  
「おもちがのどにつかえたらどうしたらいい  
か知っている?」

「さあ」

「あっちゃんにきいたんだけど、お酢をの  
むと、いいんだってさ」

§4、いろんな疑問(遊びながら考えてい  
たらしいこと)

「お母さん、こうじゃないかな。」  
カチカチ山で『戸だなのすみさい、みつ  
さいな』とタヌキがいったって昨日きいた  
でしょう。あれは『戸棚のすみを見てごら  
ん。おばあさんの着物がありませんよ』とい  
うことじゃないかな。カチカチ山の話を  
昨夜してやったがここところはくわしく  
説明すると残酷なので語呂のいいことばで  
逃げておいたが、T雄には不可解だったの  
だろう。



母「アパートかな。」

T「じゃあアパート中かぎかけちゃお。ガチャリ、ガチャリ。」

T「なお子ちゃんとけんかしたでしょ、だから首をちょん切ってる。」

母「あら、ひどいわね。」

T「ううん、僕がじゃなくて、僕とたっちゃんのかわりに首を、なお子ちゃんとひとみちゃんの首をちょん切って頼んだの。」

母「あああの方ね。(中一の竹馬の少女のこと) あの方は大きい人だから遊んじやいけないっていったでしょ。」

T「でもお友達になったんだもの。」

母「でも五歳と中学生じゃお遊びがちがうでしょ?」

T「そーお?」

母「そーよ。」

母「ろうやは悪い人を入れるのよ、ここには悪い人はいないでしょ、アパートにしたら?」

T「いやいや、ろうやがいい。」

母「どうして?」

Tは答えず、母の側に寝そべり、母のほほを爪ではじく。  
母「ああつたい、よしなきい。」

### 母の記録⑨ 文字について

文字に興味をもつようになった最初は「の」の字である。テレビでマンガのタイトルにたびたび「の」の字が出て来るので何という字とききはじめた。町に出て自動車の際に〇〇のパン等と「の」の字が目につきはじめた。

そこで家の目のつく壁に「つねお」と自分の名前を大きく筆でかいて貼っておいた。「これなに」「あなたの名前」といって一か月ほどそのままにしておいた。一か月ほどたつてT雄の留守に「みつお」と書いたのととりかえておいた。

遊びから帰って「つ」「お」はよめるから一番上の字は何という字だろうと興味をもつて母にきく。

「お父さんのお名前よ。」

T雄は父は「みつお」という名前という事は知っているの。「へえ、みつお、みつお」とよんでいる。

しばらくして前の要領で「とみこ」とかいて隣にはった。「み」知っているので「妹の名前よ」とおしえたら「とみこかあ」とよろこんでいた。最後に「こ」の字がよめるので「こまこ」と母の名前を隣に書いておいた。家中の名前が一つ一つ、頭に入ったわけである。この他小さい時から「よ

いこのくに」が手元にあつたので、よ、い、こ、の、く、に、がよめた。

主人から、かねがね、文字は一つ一つ覚えさせずに、一つのみとまり、概念として頭に入るようにしてやらなければいけないといわれているので、知っている字、つ、ね、お、み、と、こ、ま、よ、い、の、く、にの十二文字をくみあわせて「ねこ」とかいろいろこまばを並べた。

そのうち「玄関にくつをそろえてぬけるように『くつ』とかいてはつてよ」というので「くつ」と書いてはった。N子ちゃんもおもしろがって自分で「くつ」とかいて縁側の戸袋にはっていた。

しばらく字に興味があるので母が仕事をしても字をかいてという。裁縫をしているときなら、余り布にチャコで、机にむかっているときは、紙にインキで雑巾がけをしているときは、水をつけた指でかいてあげた。

わ、れ、ね、というような、よく似た字は同じ時に使つて選別できるようにもした。

半年ほどたつて、「あなた、どれくらいよめるの」といって五十音をやってみたら「ふ」だけあやしかったがあとは全部よめた。

TはAのほほを同じく爪ではじく。  
A「こんなに暗くなつてきたんだもの帰りたいな。」

T「いや、帰らせない。」

Aは半分泣き出しそうである。

母「(Tに) あなたがそんなことするから淋しくなって帰らなくなるのよ。」

T「暗くなんかいないよ、家の中は電気はついているけど。」

A「電気つけてもだめだよ、もう帰るもの。帰らなくちゃいけないんだもの。」

一旦里心がつくともう止めることはできない。T君もつまらなくなってしまふ。

T「ウィエー、ウィエーと母にすがりついてしまふ。」

母「お母さんに向かってそんな変な声を立ててもだめよ、たっちゃんときくお話し合いなさい。」

A「(掌を見せながら) ほらここ赤いでしょ。ここに包帯したいから帰る。」と立ち上り、

玄関に出て行く。

T「またおいでね。」

A「さようなら。」

母「たっちゃんは偉いわね。泣かなかったわ。何か帰る理由みつけようと思って一生懸命がしたのよ。赤くなつてるところを見てそれでそれに包帯しに帰るなんて。」

二月二十七日 幼稚園初の保護者会

月요일。父は会社、妹は他へ預けるところもないので母とT雄と妹と三人で出かけた。

十七分間隔で、お客は私も三人だけという、のんびりしたバスにのって多摩川べりを上流に向かってすすむ。

途中、プロ野球の練習場や、温室村、乗馬クラブ等あって、T雄は楽しくて仕方がないといった表情。

終点でバスをおり、幼稚園への道を歩きながら、

T雄「試験の時ほど一しよだった人、来てるかしら。」

母「いらつしてでしよ。」

T雄「きてないんじゃないかな。だってその子、先生が『眠たい時どうしますか』ってきいたら、『お水のむ』っていっちゃうんだもの。」

母「その話始めてきいたわ、ゆかいね、でも、お答えがあつてるか、まちがついてるかということよりも、どんなふうで元気よくこたえられるか、きくためらしいから、その坊やもきつといらつしやうっていでしよ。その坊やのお顔覚えてる?」

T雄「忘れちゃった。」

幼稚園の講堂には大分お集りのようである。職員室のカベに組わけがあつた。

T雄は「はなのくみ」であつた。

T雄は運動場で遊ぶ事に約束してあつたので講堂に入らずに運動場へ出る。園長先生のお話が始まるころは、もうお友達と遊んでいた。男の子は数人いたが、T雄と同じような体形の肉付きのよい坊やと二人で遊んでいた。

園長先生のお話

まず入園に際して準備する品物、服装などについてのお話があり、次に幼稚園に入る気持の上での準備についてのお話があつた。個々について具体的なお話があつたが、中でも

「お母さん方の中に、幼稚園に入つてどんなに絵が上手にかけたか、歌が上手にうたえるかと心配なさつて、絵のとじこみ(ノート)を一生けんめいみておられる方があつるが、どんな上手な絵がかけたか、という事よりもみんなと一しよに楽しく絵をかいているかみんなと一しよに楽しく歌がうたえているか、をみていただきたい。」  
そういう意味のことをくり返してうかがうと、いよいよ、期待に胸がふくらんだ。「幼稚園の積木はめずらしいので、ポケットに入れて帰つてもお母さんはあわてることなく、またあした幼稚園へ来る時に、ポケットに入れてあげてください。」というお話をうかがつた時、あつたかさがかかじかに伝わってくるような感じだつた。  
園長先生の次に、スクールバスの説明があつて今日の会は終つた。



# 幼児の友人関係 (一)

高 桑 康 雄

## △二▽ 対人関係の発達

子どもが、他の子どもたちと結びつきをもつようになるのは、二才ごろからといわれているが、その芽ばえはすでに乳児期に見ることができるといわれる。

ヘツザー (Heizer, H.) は、乳児のもらい泣きについて、声だけが刺激となっているのか、姿を見ることが意味をもつのか、を検討するために、二人の乳児のあいだに衝立てを立ててみた。すると、生後二週間の子どものについては衝立てに関係なくもらい泣きをする者が八四パーセントであるのに、二か月以後では衝立てのある場合には泣き出す子どもが一〇パーセントに減少するが、衝立てにさえぎられていない子ども同士では泣き出す者が三二―四二パーセントである、といわれる。

またモレノ (Moreno, J. L.) は、ソシオメトリー (sociometry) の研究の一環として乳児における人間関係を観察しているが、かれ

によると、九人の乳児を誕生以来一八か月間同じ部屋に生活させたところ、二〇―二八週ごろから近くの子ども同士のあいだで反応しあうようになり (水平的分化—Horizontal Differentiation)、四〇―四二週ごろから集団の中になたての関係をうみ出すような命令をくだす子どもが現われてくる (垂直的分化—Vertical differentiation) という。

一才に満たないこの時期における子ども同士の交渉は、友人関係への第一歩として意義あるものではあるが、それはかれらが偶然に身体的な接近や接触をすることによってうまれる。これをききえていけるのは運動機能の発達であろう。その意味で、おもちゃの存在は単に運動機能の発達を助けるだけでなく、かれらの接触をうながす役割りを果たすものとして発達の重要であるといえるであろう。

しかし、この段階はいわばおもちゃに遊ばせてもらっている時期とも考えることができ、子ども同士の心理的な結びつきがあるとは

いうことはできない。

子どもの情緒が発達してくるにつれて、二才ごろから、いわゆる友人関係もしいだいはつきりしたがたをあらわしてくる。このことは、子どもの自我がすこしずつ明確化し、人格の中核的部分が形づくられてきたことにより、そこに自我の拡大を求める要求が発生したことを表わしているとも考えられよう。そこで、二才以後の友人関係の発展をみていこう。

日本女子大学附属児童研究所では、ブリッジス (Bridges, K.) のものを翻案した幼児の社会性発達尺度を作っているが、それは、二才から五才までの子どものおたがい同士の行動についての三〇項目、三才半から五才の時期に見られる行動二〇項目を列挙している。

前者には、接近、まね、参加、援助、じゃま、攻撃などがふくめられ、後者には、共同、世話やき、他人の擁護、謝罪、命令、などがとりあげられている。

ここに示されている発達の方向は、表面的な、自分と友人との一対一の関係から、しだいにより大きな集団の人間関係、より内面的な関係へ、ということである。

シテルン (Stern, E.) は、幼児における集団生活を次の三つの段階にわけている。

- (1) おたがいにそばにいる (Beinander-sein)
- (2) 集団の発見 (Entdeckung der Gruppe) — 活動の内容はともか

く、集団の中にはいる

(3) 協働 (Mitteln) — 組織された活動の中で役割りをもち、活動の内容をとらえうようになる

この側面における子どもの発達は、かれらの活動の中心である遊びの中に見るのが一般である。

子どもの遊びにおいて、まずその集団の大きさが増大することが認められている。

ビスリッキー (Wislicky, S.) が三才から六才一か月までの幼稚園児の自由遊びにおいて観察された一七三の集団の構成人員を調査した結果では、三人が最も多く二三パーセント、二人、四人、五人の順になっている。

これをもうすこし年令別に見たものにグリーン (Green, E. H.) の研究がある。それによれば、二才では、ひとり遊びは六〇パーセントをこえ、相手一人の遊びは三〇パーセントに近い。相手二人は約九パーセントで、相手三人以上は二パーセントぐらいである。しかし、五才になると、ひとり遊びは三〇パーセントをすこしこえた程度となり、相手一人が約三〇パーセント、相手二人が約二三パーセント、相手三人以上も二〇パーセントに迫っている。

集団の大きさの増大とともに考えられるのは集団としての行動の組織化ということである。このことについては、ブラッツ (Blatz, W. E.) が、ひとり遊び、傍観、並行遊び、集団遊び、おとなの相手の五種類にわけ、二才児から四才児までを年令別に考察してい

る。その結果、ひとり遊び、傍観などが四―五才ではいずれも一〇パーセント以下に減少し、集団遊びは二―三才で二七パーセントだったのが四―五才で七二パーセントに増加していることがあきらかにされている。

同様の研究はパーテン (Parten, M. B.) らによってもおこなわれている。ここでは、

- (1) なにもしていない
- (2) ひとり遊び
- (3) 傍観的行動
- (4) 並行遊び
- (5) 連合遊び
- (6) 協同的・組織的遊び

に分類されている。

このように、幼児の友人関係は、乳児期からしだいに広がり、深まりをもち、その活動は組織化されていくといえる。そして幼児期においてもなお、おもちゃの存在が重要であることが認められる。その役割は、乳児期の末期のように「子どもを遊ばせる」というものではないが、たとえば、その子ども自身よりも、その子どもも持っている絵本・おもちゃ・三輪車がめあてで交渉が保たれる例も報告されている。もっともそういう例ばかりではなく、ある程度の心理的なつながりをもった友人関係もまた存在する。

しかし、幼児の友人関係が基本的には家族、とくに親の行動や判

断の価値規準によって制約される、ということは特徴的である。ある意味においては、友人の選択、活動の範囲、内容、すべてが規制されている、といつてよいであろう。特殊な例かもしれないが、「幼年期」(波多野勤子)における一郎が、友だちをほしがり、二つちがいの従兄弟と母との外出を非常にうれしがっているが、ここでも完全に親の制約のもとにおかれているのである。

### △二▽ 幼児の集団のダイナミクス (1)

幼児の友人関係において、子どもたちのコミュニケーションがどのような構成をしているかをまずみてみよう。

奈良女子大学付属幼稚園が、砂遊び場における幼児の結合を観察した研究を発表しているが、そのなかで、子どもの交渉が成立した

場合の媒介は何かを見ると、第一表のとおりである。ここでみられることは、遊具、作品が全般的に多く、ことばの位置はまだ高くない。幼児の友人関係が遊びを中心に展開し、遊びの中でふかめられていく、と考えられるのであるが、そのさい、これらの物体が媒介となっていることは、注目してよいことである。前節の終りにふれたように、幼児の友人関係におけるおもち

第1表

項目	遊具	作品	ことば	動作
3才	43.9	22.7	30.3	3.1
4才	41.0	28.8	23.8	6.4
5才	29.1	37.9	28.7	5.3

や、あるいは広く遊具の役割りをここにも認めることができるであろう。

さらに、この研究では、交渉の経過を働きかけと反応の型の分類によって行なっている。それによると、協調的な働きかけが三―五才を通じて非常に多く、約六〇パーセントをしめている。その内容は依頼・協力のかたちから、提案という方へ移っていること、それに対して強圧的な働きかけは年令と逆に減少していくことがのべられている。

反応の方をみると、協調的の反応が各年令を通じて約七〇パーセントをしめているが、単なる許容・服従・応諾・同意などが五〇パーセント近い。一方、批判的・拒否的の反応もまた増加している。

この研究の示していることのひとつは、五才児においては協調的な働きかけができる一方、批判的・拒否的の反応が増加していることから友人関係におけるひとつの転機に立っている、ということであると思う。

このようなコミュニケーションの様式と関連して友人関係の構造をみておくことが必要であろう。

田中熊次郎氏は、幼児の小集団の構造について、三人グループの場合と五人グループの類型をまとめている。そのうち、男、女それぞれ主なものは、次のようであるとされる。

#### (1) 三人グループ

(a) 男児 ①著しく目立つ専制支配的幼児がいて他はこれに追

随、または並行的行動をする (BS 類型)

②勢力のほぼ等しい者同士の対立競争 (ES 類型)

③楽しい陽気な連合グループ (MA 類型)

(b) 女児 ① ES 類型

② MA 類型

③あるひとりが排斥されてにらみ合う (RH 類型)、専

制支配的な幼児がある子どもを排斥する (BR 類型)

#### (2) 五人グループ

(a) 男児 ① BS 類型

② ES 類型

(b) 女児 ①ボスのな子どもがある子どもを排斥し、孤立させる

(IR 類型)

② ES 類型

また、男女混合の五人グループでは、BR 類型がきわめて多く観察されている。

これらからみて、幼児の場合、集団場面での人間関係には排斥的な傾向がかなりみられ、人数が多くなればますますその傾向が強まるといえることができる。

このことは、幼児の友人関係において、相互の人間理解がきわめて低い段階にあることを示しており、その結びつきの深くないことがここでもあきらかである。

# 年少児のグループ指導

実践記録



森田 礼子

子どもの生活のすべては遊びであり、遊びを通して身体的にも、精神的にも発達してくるのであって、遊びは子どもの生活の重要な役割を占めている。

幼稚園での遊びは家庭の遊びと共通な点もあるが、幼児が集団の中で遊ぶというところに違いがあり、ここに多くの教育的意義がある。この集団の中で子どもたちをどのように指導したらよいかを考へながら指導を行なった。

四歳児の入園当初の遊びは、一般に自己中心で、数人が同じ場所ですべて同じ遊びをしていても友達とはあまり交渉を持たず、各々が平行的に遊んでいる。このような状態から集団指導をして行く場合、幼児に集団意識を持たせ、その活動を高めていくためには、教師のいろいろな配慮が必要であって、人との関係、物との関係を相互につけながら、子どもの発達や興味にそくした適切な指導がなされなければならない。

家庭から幼稚園に入ったとき、その子どもの家庭環境や地域環境によって個人差が非常に大きく、すぐ集団生活になれる子、なかなか集団になじめない子ども（破壊的な子・攻撃的な子・我がままな子・気分がむらな子・口をきかない子・閉鎖的な態度を示す子）があるので、あらゆる子どもの状態を理解し、把握しながら指導をしていく必要がある。

幼稚園におけるグループ指導の場合は、自然発生のグループ（遊び中心のグループ）・好きな友だち同志で作らせるグループ・全く教師の意図で作る意図的グループなどいろいろなグループの作り方があるが、集団構成のメンバーは年齢、性格および構成する時期などにより方法が異なり、これらの状態に適した指導が必要になってくるものと考えられる。年少児のグループ作りの初めの段階は、仲よし友だちを作る、いいかえれば個人と個人との二人の結びつきを大切に育てて行き、更に少数グループになる可能性を留意する。また一方、共通の興味のある課題を教師が用意し、自然発生のリーダーをうまく動かし役割をつけながら遊びを進展させることにより、グループのつながりを強めていくことが考えられ、この二つのことがらを互いに操作しながら集団意識を高めて行くことが必要と思われる。

次に実際に指導した具体例を挙げてみることにする。

1 友だち作りのきっかけを作る。

○ 登園のときは、近所の友達をさそって来るように話し、帰宅のときは同じ方向に帰る友だち同志手をつながせ、グループを作ら

せて帰るようにさせた。

○ 遊具・保育材料を媒介として仲よし友達のきっかけを作る。

○ リーダー的な子どもを使って遊ばない子どもをきそう。

○ 身体測定、雨降りりのときの衣服の脱着を友だち同志で手伝い合  
う。

○ 教師が興味ある課題を用意し、意図的にグループを作り、グル  
ープにそれぞれの役割を与え集団遊びをする。(例えば汽車ごっ  
こ、お客さんごっこなど)

○ 自然に発生した遊びに教師がグループの一員となつて、グル  
ープを作りながら遊びを發展させていく。

以上の結果では今までむらがつて遊んでいた状態から、数人があ  
る程度共通の目標を持って遊ぶようになった。しかし、二人だけの  
結びつきは強く、何らかの原因ですぐ分散する。この期に今までの  
仲よし友だちが別の友達と結びつくことがあり、仲よし友だちも次  
第に変化してくるようになった。

2 自発的に友だちを作りながら、更に小数グループに發展させる。

(リーダーになるきっかけを作る)

① 六月上旬、机の上に桃色のビニールリボンをたくさん用意し、  
次のことが守れる子どもは胸にリボンをつけることにした。

・ 付添から離れても泣かない

・ 友だちをさそって仲よく遊ぶ(遊べない友だちをさそう)

・ 困っている友だちを助けてあげる(理由をきいてみんで考  
えてあげる)

・ 間違つたことをしている友だちに教えてあげる

○ 約束した次の日、リボンの箱に大勢集まってリボンの取り合  
いが始まる。級の中でもリーダー的に振舞っている子どもが、  
みんなを一行に並べてひとりずつ胸に結んでやっていた。

○ 消極的な子どもや全然遊ばない子どもが急に元気になり、自  
主的な行動ができるようになった。

○ 友だち意識がついてきた。(他人を批判し、また自己反省が  
できるようになった)

○ 友だちを積極的に作るようになった。(仲よし友だちが日増し  
に多くなつた)

○ 幼稚園を楽しみにくるようになった。(集団で遊ぶ楽しさが理  
解できてきた)

② 六月下旬頃、次々といろいろな色のリボンを要求し始め、赤  
・ 青・黄・白・水・紫・橙および桃色の全部で八色のビニール  
リボンと同じ場所に同量用意しておいた。

○ 自分の好きな色を自分の好きなとき、取りかえてつけるよ  
うになった。

○ 二学期になり、遊びグループが自然に同じ色に別れて遊ぶ  
ようになった。(全部ではないが意識なく同色が集る傾向が  
見えてきた)

○ 友だち同志相談してリボンを変えるようになった。(今まで  
仲よし友だちでも自分の好きな別々な色のリボンをつけてい  
たが、気にするようになり、二人で相談して同じ色を決めて



つけるようになった。二人の友だち関係から三、四人の友だちと発展し、リボンの取り替えもひんぱんになり、友だち範圍が広がってきたものと思われる。

○ 遊びグループによりはつきりリボンの色が別れてきた。(例えば、赤のグループで砂場をして、次にままごとをしたい場合、ままごとをしている子どもと同じ色につけ替えて遊ぶ傾向になってきた)

○ 遊びにおいて、一般に男女の別なく、また積極的な子ども、消極的な子どもも区別なく遊んでいる。

○ 消極的な子どもはグループから落ちていいる場合もあるが、他のグループでさそいかけられ遊んでいる。(ひとり遊びや遊べない子どもがなくなる)

3、グループで話し合っって役割を決めながら遊びを發展させていくことにより、グループ意識を高めて行く。

○ 教師が一つの課題を与えた遊びの場合、または自然に発生した遊びの場合、(こっこ遊び)グループの中で話し合っって役割を決めて遊ぶ。

○ 決断がなかなか困難なグループは教師がグループの一員になり、話し合いがスムーズにいくように助力する。

○ 級でまとまっって活動させようとするとき、例えばお弁当を食べる、帰宅のときなど各グループから相談して出した当番と教師とが話し合い、グループをリードしみんなで協同していくことにより、集団意識を高めていく。

相談をしながら役割を決め合うことは幼児にとって困難な場合もある。例えば、自分の欲求や意見が通らない場合、また反対に消極的な子どもの集まるグループで、リーダーの役割を取る子どもが出てこないとかさまざまな場合もあるが、教師は常に幼児の個人個人が集団内の相手を認め、自己を生かしながら話し合いが進められていけるように、その場面に応じた指導をしなければならぬ。

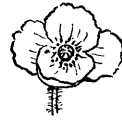
4、指導の手がかりをつかむ。

○ 観察記録をとり、個々の子どものグループの動きをとらえて指導する。

○ C A Tテストを使って欲求テストを試してみた。(現在遊んでいるグループ内での役割と、自分が欲求している役割との差を調べ指導の手がかりを見つげようとしたが、このテストに入るまえに時間的に十分な研究ができず思うような結果が得られなかったので、今後の研究課題として残されている)

集団意識を高めていくためにこのような方法を考えて指導してきたが、教師はつとめて子どもたちの前面に立つことなく、今後も人間関係に目をむけ、互いに人の意見を尊重し、各々の役割に責任を持ち、だれもが喜んで遊びに参加し、集団活動が高まっっていくように心がけなければならぬと思う。

以上実際の記録について記述してみたが、不勉強で欠点も多々あることと思われるが、今後更に研究を進めて行きたいと思う。



## その土地が必要とするなら

—— 仏教幼稚園のことども ——

友松 あきみち

### 一、日教組の幼年部会で

友人にすすめられて日教組の全国教研大会にここ二年ほどつづけて傍聴させてもらっている。目的は幼年教育に関する分科会で、この分科には小学校の先生が多数参加しているため、幼小一貫した話題の出ることが多く、いろいろと勉強になる。それに指導者格の先生方の影響だろうか、四四制の初級教育の理想がうかがえて考えさせられることも多い。今年の東京の会では特に中執委の方々によって、分科会の主題を教育の制度論にしぼろうと意図しておられる様子があるがわれ、私はとりわけ興味をもって聴くことができた。

私立幼稚園の側でも現在団体として特別な関心をもって進めている研究課題は、これからの日本の幼児教育をどうすべきかという点とである。国際的な教育行政の推移を見ていると、ここ数年の間はかなり多くの国が教育体系のねりなおしをはじめていることが分かる。我が国でも教育課程の改定など最近行なわれているが、あと数年もすれば義務教育の対照となる学童数の減少によって、当然再度の教育改革が行なわれる段階が近づいているものと予想される。義

務教育が上にのびるか下に引き上げられるかは分らないけれども、教育費が余り、教員や教室がだぶつきはじめるようになったら所管省としても何らかの策をこうせねばなるまい。

このような将来の変動に対して、私幼の立場にある者と日教組の幼年部会の先生方との考えの間には、もとより多少のひらきのあることはみとめざるを得ない。たとえば前述の分科会における制度論のねらいの中には、就学年齢のひき下げを見こしての、教育の機会均等ということが意識的に打ち出されているようであったし、それへの到達手段については甚だアナルキーでさえあった。新設置基準による制約などは殆んど考えずに幼年学級とか、幼童部を小学校内に一つも多く設置することが、施設に恵まれぬ地方民の教育的な福祉であるという考えが強い。

私はそのことを否定はしない。同じように自由な立場で私立のわれわれも保育をすすめることが出来たらと改めて思うことである。だが、分科会の発言を拝聴しながら、一つの懸念を持たざるを得なかったことは他でもない、出席されている先生方の多くが就学前の教育を、保育の意味することと区別して考えられているようであっ

たことだ。話し合われていた幼年学級での教育ということの中には、保育所的な保育要素は殆んど含まれていない。勿論考え方の中に保育所 ↓ 公幼 ↓ 小学校という一貫性をもっておられるのだろうが、幼年教育の現場には実際に広い意味での保育が必要なのである。幼稚園や保育所の施設に恵まれぬ地方であるなら尚更のこと、就学前教育を含めての低学年教育に全日制的な保育の必要があるのではなからうか。

この分科会でとりあげられている保育指導の問題にしても、貧困家庭とか、寒村における教育の実情といった日本の陽の当らぬ場所での教育者の切実な訴えが強い。それだけになおのこと児童福祉ということが、もっと違った形で公立幼稚園或いは幼児学級の運営の上に考えられていかねばならないのではなからうか。

私は幼稚園教育にたずさわっている一員であるが、保育所の社会に果している役わりについての関心は深い。仏教幼稚園に関係していると、同じ仏教者の同僚の中に保育所の運営にたずさわっている者が多く、またそれらの現場の先生たちとふれ合う機会も多いからである。

## 二、幼保提携の仏保

日教組のその分科会で、私は傍聴者のひとりとして発言する機会を与えられた。私は卒直に次の三点について考慮されたい旨をお願いした。一、新設置基準に到達するため運営上の困難に当面している私幼の立場も理解してもらいたいこと。二、幼保の二元的な保育行政について、子どもの俸せのために一貫したものを考えてもらい

たいこと。三、私幼としても制度論には深い関心を抱いているので、現場の保育関係者を中心に民主的な会議のもたれることを提唱した。

私の発言のうち第一は、決して皮肉ではなかった。後述するが、設置基準の問題は法人化問題とからんで私幼、とりわけ仏教立の者にとつて打開に困難な問題が多いのである。第二のことがらは必ずしも素朴に一貫性とか一元化という割り切り方で解決できる問題ではない。特に私幼の立場から云えば保育の多様化ともひろげて考えられることであつて、その点では公立とか、かなり特殊化している私立幼稚園の立場にいる先生方の考えとも異っている。同様に第三の保育者会議についても、形式的な一元化を旨ざすということではなくて、今日の日本の社会で最も望ましい保育の在り方が、制約を受けずに互に協力しながら進展していくためには、保育者同志で充分に話し合い、よく現状を見さだめて新しい保育の方法を研究したいと考えたからである。

単的に言つて現在、幼稚園と保育所の交流は必ずしも充分には行なわれていない。保育雑誌の例をあげてみても、幼保それぞれに専門の場で生じた事柄について、お互に理解し合う必要のあることすらも取り上げられていないことが多い。理由をことさら述べる必要もないが私の言いたいのは、幼稚園と保育所との間に大きな窓がひらかれているのは、おそらく仏教立の団体の場合だけではなからうかということである。基督教立には殆んど保育所はないし、神社系統では施設の総数がありにも少ない。その点仏教立の場合は幼保をあわせて全国に約四千五百の施設があり、仏教保育協会とか、宗派

別に分れた保育団体を中心に人事が交流しているところに今日の保育界で大きな存在の意味があるのだと思う。

それ故本誌から求められた課題は仏教幼稚園についてではあったが、仏教幼稚園の現状について語る時、仏教保育所についてもあわせて語らねばならぬ立場に私は置かれている。ながく保育にたずさわっている仏教者の友人の話を聞いていると、幼稚園から保育所にかわったり、保育所から幼稚園にかわったという経歴の方がかなり多い。その土地が必要とするならば、寺内に幼稚園をひらきながら、また一方保育所を持たれているというところもある。

「その土地が必要とするなら」と私はのべたが、仏教の保育施設を理解しようとする場合、この受動的な解説のことばに多くが語られていることを注意してもらいたいと思う。はじめから教育ひとすじに生きて来た人の耳には、不安定なことばのように受けとられるだろうが、保育に入る入口が違うのである。

もとより寺院によっては、経済的な事情から保育にふみ切らざるを得なかったところもあろう。寺院の社会に対する教化力は明治以来、特に昭和に入ってから急速に低下している。私自身も街頭にチラシをまき集會に力をそそいで来てはいるが、一般人の仏教に対する関心は決して高まって来ているとは思えない。帰するところは教役者としてのわれわれの無能の致すところであるが、しかし寺内に生活する者にとって、世間に何らかの形で自分の生涯を役立てたいと願う気持は決して少なくはない。世間と寺、或いは自分の役割とということを考えるにつけても、その土地が必要とするなら保育の道にもいそいでいくことが仏教者の生き方の一つとも受け取られて

くる。

仏教立の保育施設を運営することによって、幼児はもとより家庭の中にも仏教が理解され、その精神が何らかの形で布教されていくであろうと考えることは、至って素朴な解釈ではあるけれども、そこに宗教的な気持の燃焼が行なわれていることを私自身も感じていくひとりである。

### 三、仏教保育界の問題

昨年の秋には、仏教保育関係者の全国大会が東京の社会事業會館を中心にひらかれた。幼保関係の園長、現場の職員が千三百人ほど集會して、仏教保育の内容と運営について五つの分科會を持ち討議している。仏教保育と限って保育内容を話し合うことも難しいことだが、従来仏教保育と言えどかく行事中心であったり、教材本位のものに限られていたけれども、幼児教育の理解がすすむにつれて次第に生活指導の中に仏教精神をどのように生かしていったらよいかということが問題になって来ている。

ヨーロッパの教育思潮から引きつがれて来ているキリスト教の保育とちがいが、仏教の場合は具体的に保育の中に消化していく理論と事例にとぼしい。その点仏教立ははまだ施設改善の時代にあると言えぬこともないが、保育内容を議する時何時も問題になるのは次の二点である。一つは仏教的な信念を持って臨んでいるのであれば、普通の保育であってしかるべきであると解する見方。二つは仏教者が行なうものである以上は、あくまで具体的に仏教的な信念が保育の上で形となって現れていくべきであるという考え方である。

そのどちらも実際には大切なことなのだが、幼児に接する現場の先生方に仏教に関する理解の乏しい人がいたり、或いは逆に成人本位に受けとっている仏教の教えを、そのままの形で幼児に与えようとする場合などいろいろと問題が生じてくるわけである。

大会の綱領の第一に「慈心不殺」ということがあったが、私の出席した分科会ではそれを指導理念として、実際に保育の場でどのように受けとっていくべきかが論じられていた。この点をとり上げても考えさせられることは、仏教の人生觀をどのように平易に幼児の生活の上に発展していくことがよいのか、生命尊重の保育を行なうことであると解釈しても、それは道徳談議に終りかねない。宗教というものは、その先にたずねる道があるわけで、人の心の熟し方に最後の帰結が求められるところに仏教保育のむつかしさがあるわけである。仏教保育が成熟していくためには、理念を体でうけとめて、子どもと共に生活していく保育者の自覚の発展が必要なのだと思う。

保育の内容と併行して仏教園の運営に問題の生じていることは、公法人化の問題である。特に社会福祉法人の場合は宗教教育の是非の問題にまで結びついてくるので、簡単に法人化の促進をはかることは出来ない。

また法人化しても幼保のような小さな施設では、その永続性が保証されない限り財産帰属の問題もまだ未解決であって、教団との結びつきが強かったり寺財管理上の責任の受けとり方によっては法人化にふみきれぬ人も少なくはない現状である。

保育の公共性を考えたら、特に国からの助成ということを考えれ

ば早晚解決しなければならぬことであるが、園存廃に関する問題は仏教立に限らず私立全体の関心事であって、今日私立幼稚園が日私幼という団体に結集され、保育所が全私保連の団結を強くしはじめて経営上の自衛的な体制をととのえて来ていることをみても明白である。その中で特に仏教幼稚園が仏教保育所と共に、信仰上のつながりと寺院経済を背景に持つ教団との複雑な関連性をもって、近年宗团的な防衛体勢をととのえようとしていることも、時代的な段階として認めねばならないことであると私は考えている。

私は先年ある地方の本願寺附設の幼稚園で、その地域の仏教関係の先生方に話をする機会をもった。その寺は明治から大正にかけて米穀商を営んでいた私の祖父が、信者の食する米麦をおさめていたところであった。祖父は門徒の信仰に厚く、おそらく随喜して納米の仕事にはげんだことと思われるが、亡き祖父母の信仰がその寺との結びつきにおいて大きく生き甲斐を見出していた日々を憶うとき、例えそこに立派な園舎が建てられていても、やはりその園地運動場は歴代信徒の汗と信仰の結晶のように思えてならない。心を同じくする無数の人々によって奉仕され引きつがれて来た土地は、たとえ地域の人々がその土地を保育の場所に望んだとしても、やはりそれは宗教の地である。

仏教保育の行く末を考えると、寺院の多くは経済的にはまだしも恵まれているので、おそらく特色をもった園として永続していく園が多いと思うが、保育にたずさわる者の多くが保育者であると同時に何よりも仏教徒であるということ、その点に仏教保育の将来の可能性と共にまた限界もあるのだと思う。

# 心理劇への招待 (一)



鈴木隆子  
中村悦子

ある講習会で、次のような試みが行なわれました。当日の参加者は約二十名。会場には、心理劇の舞台が部屋の中央に用意してありました。

監督の指示によって、ひとりの若い女の人が舞台にのぼり無言劇をすることになりました。残された全員は全部、観客です。

女の人は、舞台の中段の角に立って、右足をちょっとまげて、窓ごしに夜空を眺めていましたが、間もなく、観客の方に顔をむけ、「おしまい。」と、言いました。

このあとで、観客のひとりひとりの無言劇についての感想が、語られました。それは、次のようなものでした。

○バスに乗ろうと思って走ってきたが、どうどうまにあわないで、ひとり停留所に立っていると。

○別れたくない人と今別れて、ぼんやり考えこんでいるところ。

また、うしろをふり向くかもしれないと思ったところ。

○あれ、これから何をするのかなと思ったら、あの人はこれでおしまい、なんていうことになって、どうもさっぱりいけません。

○女の人が、これからお見合いに行くところ。どんなことが起るかわからない先のことを案じて、今立っていると。

○デパートの売り場の前です。財布の中を考えながら思案しているところ。買いたいものはここにあるけれど、明日のことが気になるって。つらいところです。

こうして、たった三十秒の間、ひとりの人がだまって行為したことを、観客はそれぞれみな違ってとらえていました。どれも、観客にとっては真実であり、たいせつな体験でしたけれど、このように違うのです。観客の感想発表のあと、演者は、次のように説明をしました。

○舞台にのぼったのはいいけれど、さて、これから何をしようかなと思っていました。自分の思いついたことを表現することは、なかなか不自由なものでした。

心理劇では、監督・補助自我（補助者）・演者（患者）・観客・舞台の五つが必要です。

心理劇で用いられる舞台は、普通円形の三段舞台です。この三段階は、演者の心理的な推移の段階を示しています。劇にはいる前のウォーミングアップの段階では、演者の多くは舞台の中段・下段のあたりで心の準備がおこなわれる場合が多いようです。初めて相談室（舞台のある部屋）へ来所したもののなかで、そのうち幾人かは下段に足をかけることができませんでした。しかし、相談治療が進むにつれて、次第に演者の行動領域は舞台全体に拡がりました。

心理劇は、この三段舞台がなければ実演することができないものではありません。床の上にチョークで線をかいて、それを舞台にして振るまうこともできるわけです。人びとの集まったその場所に、移動式心理劇用舞台を用意することも便利でしょう。この舞台には、規定の広さや高さはありません。ある幼稚園では、砂場を劇場にしてその中を舞台にして、心理劇をしています。

ある日、心理劇研究会に、ひとりの幼稚園の先生が参加しました。そのときの劇体験をきくことにしましょう。

『私は、幼稚園の教師を七年つとめてきました。考えてみると小さきさまざまな事件の連続でしたが、一方、その日その日の仕事に追われ、私自身の保育技術の進歩がどこにあるだろうかと考えることがたびたびでした。その上、今、組に二人、保育をしていく上でかちんとつき当る子どももいて、このまま過ごしてしまうのも困るなと思っている、そんなとき、誘われたのを機会に、この心理劇研究会にきました。』

会場についたときは、すでははじまっていたのでしょうか、十四、五人の人たちがにこやかに話をしていました。

正面には、舞台があります。それは三段になっていて私たちは、舞台を囲むように腰をかけてしました。

『では、そろそろはじめますか。少し動かなくては。』

『では、Aさん。監督になって、全員が参加するウォーミングアップをしてください。』

監督と呼ばれた人は立ちあがり、舞台の方に近づきながら、言いました。

『それでは、みんな立って、舞台の上を歩きましょう。何になってもいいのです。さあ、自由に歩いてください。』

みんなは立って歩きはじめました。

『自分のなりたいたいと思うものになって歩いてください。なりたいたいものになって歩いたら、席にもどっていいですよ。』

私もみんなのあとについて舞台へあがりました。私は、一番上の

段にあがろうとして、ふと圧力を感じました。三十センチほどのぼるだけなのに、でも、思いきってのぼり、帰ろうとしてうしろを向いて、驚きました。すでに席についた人たちがこっちを見あげています。みている人と、そして、いやに高いところに立ってみられている私。私は、急いでおりました。おりて、席にかえって眺めると、何でもない舞台です。

『はい、みんな何になったのかな？』

会員は、次つきに話しはじめました。

『おかあさんとあの坂道を歩いてきた。』

『ぼくは、三つぐらいの女の子になって、あちらこちら走りまわってきた。』

『私は、歩きまわっているうちに、柵の中の動物になったような気がしてきました。』

感想を述べた人の中には、私と同じ年ぐらいの女の人も、学生も、年輩の男の人もいました。

『みんななんて空想的なのかしら。どうしてそんなことを想ったり感じたりする余裕があるのかな』

と、私は、ふしぎでした。

『あなたは？』

『えっ、私？ ただ歩いただけで……。』

『はじめて舞台にのってどうでした？』

私は、何になろうなどと思う余裕もなかったこと、上の段にあが

るときの気持、みることとみられることの違う驚きなど、ただそれだけを、感じたままで述べました。

『そう、おもしろい体験でしたね。舞台の力について。その舞台ではじめての気持は、たいせつですね。』

私は、もう一度驚きました。

『こんな小さな気持までたいせつにするのかしら。』

そういえば、こんな新鮮な驚きの気持も久しぶりでして、それを素直に述べてしまつたら、自分がすつきりとして、仲間の一員として確実にとけ込んだような気がしました。他の仲間も、それぞれ感じたままで、述べているのでしょうか。この部屋にふと入ってくる人は、若い人中年の人と、違いはあるにせよ、段の上を同じように歩いている人を見てもいいでしょう。その一人ひとりにきいてみると、おもいはみなそれぞれ違うのです。そして、その十人十色が、ここではみんなたいせつにされているのです。』

ここで、心理劇の「演者」と「観客」について、述べましょう。

演者とは、舞台上で演じる人であって、病人（患者）とか不適応者とかいう意味と同じではありません。患者だと思われる人も含めてみんなが演者になりうるのが、心理劇の特徴です。心理劇では、個人生活の調整を主な目的とするときにも、治療場面では、幾人かの演者や観客をまじえて劇がおこなわれます。けれど、問題の性質によつては、演者や観客の数の制限されることがあります。



心理劇によって治療されるのは、舞台にのぼって演じるものだけではありません。観客のひとりひとりにも、劇の効果を期待することができません。観客は、劇中の人物に同一化して（同体感をもち）、演者の問題を自分の問題として考えることができます。そして、劇をみながら治療的に効果のある洞察体験を得るときもあります。それで、患者が役をとって振るまうことができないときは、無理に舞台にのぼらせることをさけて、まず観客の役割をとって心理劇に参加させることもおこなわれます。

演者は、観客のいることによって、自分の振るまっていることが、社会の人びとにはどのように受けとられているかという事実を知る機会を得ることができるでしょう。演者が、役をとって空想の世界にひたって振るまっているときなど、観客の笑いや話し声などを耳にして、現実にはひきもどされる場合もあります。

観客は、演者とはまた異なる心理劇の促進者として、重要な役割を荷なって劇に参加しているのです。

会場にはいるとすぐ、演者として、また観客として、心理劇の体験をした幼稚園の先生は、次のような自己紹介の体験をしました。

「自己紹介も変わったものでした。

『今日は、新しい方もみえていらっしやいますから、舞台を使っても、自己紹介をしようと思います。どんなやり方でもいいのです。でも、はじめにする人とは違った型で次の人はやりましょう。必要

だったら、ここにいる人を使ってしてもいいですよ。』  
私は困ってしまいました。自己紹介のやり方は一つしか知りません。自分で自分を紹介するやり方だけです。

『はじめにやって、あとの人を規定するようになると思うけれども』

と、独り言を言いながら、立ちあがった人がありました。そして、舞台の上を二、三步あるいて、話しはじめました。

『都合がつけばきてもらおうと思ったのだけれど。うん、今のところ十四、五人きている。今度の研究会で、みんなの意見をきこうと思うけれど、ぼくとしては、小集団と心理劇をテーマにして社会とのつながりの中で心理劇を考えるときていると思うている……。』

と、その人は、実際にはそこにいない誰かを想定して、その人に話しかけながら、私たちには、自分自身を明らかにするという自己紹介のやり方をしました。

『では、今と違った型で、自分を。』

次の人は、さつと立ちあがり、舞台にあがると、

『私はB小学校の教師です。よろしくお願いします。名前はC子。』

と言って、自己紹介をおえました。  
私の自己紹介と同じかたちです。さあ、私の番になったらどうしよう。

『次の方。』

次の人は、

『ちょっと出ていただけますか？』

と、会員のひとり誘いを、教育長という役割を与えました。

『はい。』

との合図ではじまった舞台上での二人の話し合いから、その方は、小学校の校長先生とわかりました。

『次の方は、どんな点で前と違えたらよいでしょうね。』

自発的な回答が行為の上に誘い出されるように、監督が言いました。次の人は電話で話をしました。

『一番はじめのは、ある人を想定しながら、ひとりだけでよびかけのかたちで演じ、次は、ここにいる人全体に直接に話しかけました。』

その次は、ひとりの補助自我を使って、その補助自我も動きながら二者関係で自己紹介をしました。次は、補助自我を電話のむこうにおいて、自己紹介がおこなわれました。それぞれ違いましたね。で、また別な型で、しましょう。』

ここでは、次つぎに、『新しくなること』が、要求されているようです。みているが、私は、この新しさというのが、奇抜さとか人目をひくというものとは違うようだということに気づきました。

私は、立ちあがりました。

私も動いてみたいという気持ちで自然に立ちあがったのですが、どうするかという具体的なことはきまっていませんでした。

そのとき、私がこの会場の入口で会った方が立ちあがって、私に話しかけました。

『会場でいっしょになったところを二人でやりましょうか。』

『そうですね。ここを入口にするのですか？』

『そう、この舞台を道路にして、あちらとこちらから歩いてきて、出あったところをしましょう。』

『はい、では、はじめてください。』

と、監督が合図をしました。

私たちは、それぞれ舞台の両はじから歩き出しました。

『あの、ちょっと伺いますが、心理劇研究会をやっているのは、こちらですか？』

『はい、ここです。そちらもご出席なさるところですか？ 私も

まいりますからいきましよう。』

『もうずっと長く出席していらっしやるのですか。私は、今日はじめです。』

『時間の都合がつき次第出席しています。F小学校の教師をしているGといいます。』

『そうですね。私はH幼稚園にとめているIです。』

『では、まいります。』

\*

\*

(お茶の水女子大学児童臨床研究会)

# 実践記録を資料とした

## 導入過程の研究

今泉喜久子

本田和子

——はじめに——

保育の現場において、その瞬間々々は極めて体当りに行なわれがちである。そして「その場その場で瞬間的に提出される具体的な問題、それをいかに解決し、いかに展開させるか。」その判断は、当面した保育者のその場での全人格的な知恵を綜合してなされるか、或いはその個人もしくは園での慣習によってなされるかの、いずれかである場合が多い。そして、保育の経験が重なり、保育に熟練してくるに従って、その瞬間的な判断や解決が、その場の保育を成功へ導く確率は次第に高まってくるであろう。

保育者の保育技術が向上し、問題の処理が巧みになること、それは一応、現場的にみての保育の進歩ということが出来る。しかし、これら具体的な成功体験は、そのままではその個人個人の瞬間的な体験にとどまって、個人的な経験の世界以外には、資料としても、理論としても蓄積されることがない。

そこに一つの問題を感じるのには私達ばかりではないであろう。それは、現場からよりよい保育を行なうための法則が導き出される機

会を無にしてしまうことになるし、理論と實際を平行したバラバラなものとして存在させる結果をも招きやすいからである。

「現場の研究」ということが、保育の前進のために重要視されている。そして、問題意識をもって場にのぞみ、現場で発生した解決を要する事柄を把えて問題を設定し、それに対処することが要請されている。従って、格別研究的な意図を持たず、体当りに営まれた実践活動の所産、しかも現場的価値の極めて高いそれらを、研究的に処理し、原理化し、体系化するということに対して、私達は今少し関心を向け、努力すべきなのではないだろうか。

「現場における研究」の障害となるものとして、経験を至上のものとし、経験に依存しようとする態度が挙げられる。しかし、経験を客観的に分析・処理するという手続きを怠らず、それを一般化し体系化しようとする態度を忘れないならば、経験主義と研究主義は矛盾することなく両立し合うものと思われる。

私達はこのような立場から、実際に展開された保育活動の記録を分析し、その過程を考察するという試みをなしたわけである。

## (1) 方法

① 私達は例年農繁期季節保育所を開催している。ここでの実践は、場所・設備その他の条件が極めて特殊であることも手伝って、理論を超越した体当りの保育の展開となりがちである。私達はこの保育を一つの対象として考え、前記のような考察を行なってみた。

② 季節保育所の収容児は一般に次のような特質をもっている。即ち、

イ、社会性の未発達。(集団に入らない。泣いて家に帰る。口をきかないなど)

ロ、経験の貧しさからくる特性。(遊具・遊びへ興味を示さない。遊具の扱い・遊び方を知らない。知識が貧しい。言語生活が貧弱である、など)

ハ、集中力に乏しい。(野生的・衝動的に生活している)

ニ、年齢混合の扱いを余儀なくされる。

ホ、基本的生活習慣の未確立から生じる集団生活の混乱。

従って、各々が個人的な興味に従ってバラバラに遊びがちであり、戸外では、花を摘む・蛙をつかまえるなど、室内では、かけ廻る・たいこをたく・積木やお手玉を投げ合う、などの行動が発生しやすい。保育者の側で予定し準備した活動への導入が極めて困難である。このような対象がスムーズにある活動へ導入され、積極的にそれを展開させていった成功例があるとすれば、それは考察に価する実践例であると考えられる。(「報告事例A」はその一例)

そしてこの場合は、研究の主題は導入過程の考察という点におけるわけである。

③ 資料の性格が極めて特殊であるので、その点を考慮して、一般の幼稚園における資料に基くものとの比較検討を行なった。

(「報告事例B」)

④ 資料は次のようにして求めた。

「報告事例A」に関しては、保育期間中を通じて成功したと思われる導入例を、保育者自身(ここでは今泉)と指導者(ここでは本田)が選び出し、保育日誌・日報などをもとにして、忠実にその場面の経過をおもい出すことに努め、それを記録の形に整えた。

「報告事例B」に関しては、保育者自身(今泉)は同様の手続きで記録を整えたが、この場合は客観的な観察記録(観察者本田)があったので、それと総合して資料とした。

⑤ 資料の分析及び考察は次のように行なった。

イ、保育者自身(報告事例では今泉)が、幼児の導入に関して効果的に作用したと判断し得る箇所を選び出す。

ロ、実際に保育に当らなかつた者(報告事例では本田)が、記録をみて、前者と同じく、同様の手続きをとる。

ハ、両者の選び出した部分について、一致したものは無条件にとり上げ、不一致の部分は話し合いの結果、選択して採用した。

ニ、選び出された部分について、各々の箇所の有する意味・効果度・適切性を検討した。

## (2) 保育の経過

報告事例AはM部落保育所での、開所後七日目の午前中の経過である。男児五名が保育者の誘導に従って、「お店やさんごっこ」を三時間以上にわたって展開している。

報告事例Bは、S幼稚園における六月下旬の自由遊び場面の記録である。S幼稚園の戸外設備は次のようである。

新しく設備されたシーソーが最も利用率が高く、他の設備の利用率は従来より幾分低下した状態で六月下旬を迎えた。特に砂場で遊

遊具名	数	六月中の利用状況	備考
ブランコ	4	いつも誰かが利用している。いつも数名の男児が利用する。	
ジャングルジム	1	右に同じ。	
すべり台	1	時々2、3名が利用する。	
たいこ橋	1	時々2、3名の女児が利用する。	
鉄棒	3	時々2、5名乗ってそれ以上が待っている。	
シーソー	1	4、5名乗ってそれ以上が待っている。	
砂場	2	たまたま男児1、2名が利用する。	六月上旬に新しく設備

ぶ幼児が極めて少なく、稀に砂場に入っている。砂をいじる・砂をすくう・こぼす、といった単調で表面的な活動に終始して、積極的・構造的な遊びが展開されることは殆んどなかった。

次の記録は保育者（ここでは実習生今泉）の自然な誘導が意外に効果を挙げて、七、八名の幼児達が積極的な砂遊びを展開し、次に予定されていた室内活動に移ることを喜ばなかった事例である。六月下旬のある月曜日の朝、自由遊び場面で発生した活動であり、報告者（今泉）は年長組所属の実習生である。

### (3) 分析の結果

前述のような手続きで分析した結果を一括すれば次のようである。（表Ⅰ）

これらの中で、教師と幼児の活動が、導入に効果的に作用している場合を、更に分析し、その活動内容を分類した。（46頁表Ⅱ）

### (4) 結果の考察

前述のような結果は、何を意味するのであろうか。具体的に、幼

表Ⅰ

計	導入に効果があったとみなされる事柄		教師の活動	幼児の活動	材 料	その他
	A	B				
35	⑥のイ、⑦のロ、⑩⑪⑫⑬のイ、ロ、ハ、⑭のイ、ロ、ハ、⑮⑯のイ、ロ、ハ、⑰のロ、	⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰のイ				前日の活動
14		⑮⑯⑰⑱⑲のイ				
11		⑱⑲⑳㉑				真剣な雰囲気

児のある活動へ導入する場合には、私達のとるべき行為をどのように指示しているのであろうか。

### ◆教師の活動について

①言語のみの誘導は効果が少ない。

教師の活動内容をみると、それは全て行為或いは言語を伴った行為であって、言語だけが幼児を動かしている場合がない。これは極めて興味深い資料と思われる。即ち、対象とする幼児達にはことばだけの導入は効果がなく、行為或いは行為とことばの結びついたもののみが、効果的に働いているわけである。

②対象の相違に応じて、効果をもつ教師の活動も異ってくる。

表Ⅱによれば、事例Aと事例Bにおいて、効果を挙げている教師の振舞い方がかなり異っている状態が認められる。即ち、事例Aで効果を挙げている「実際に遊んでみせる」、「魅力的な材料を興味深げに示す」という活動が事例Bでは余り効果がなく、逆に、事例Bで効果のある「幼児の活動を技術的に援助する」、「幼児を励まし賞

「事例A」

教師の活動	幼児の活動	材料
<p>①到着。(午前七時二〇分)</p> <p>②準備 (戸をあける。玩具) を出して列べる。</p> <p>③「さあ、絵を描きたい人はフレバスを出す。」</p> <p>④「あ、今日はこれを塗んだったね。そして、お店やさんごっこしましょう」</p> <p>⑤「積木で遊びたい人こっち」と積木を出してやる。</p> <p>⑥イ、「これ汽車、仙台行き、ポ—ポ—」と動かす。</p> <p>ロ、「汽車ごっこするの」と、カバンと同時に笛ひもを渡す。</p> <p>⑦イ、塗っている状態のをぞいてみる。</p> <p>ロ、果物を塗る。</p> <p>⑩イ、「カバンもあるし、果物も一杯になったから、こんどはお店やさんしたら？」と塗り上げたものを見せる。</p> <p>⑪「はい、お釜かけて上げましょうね。」と牛乳びんのふたを分けてやる。</p> <p>⑫「果物屋さんと玩具屋さんね」と画用紙製の果物と、あり合せの玩具を渡す。</p>	<p>①雨の中を保育者の到着を待っている。</p> <p>②玩具をいじる。(たいこをたたき笛を吹く。)</p> <p>③集ってくる。</p> <p>④イ、幼児A・B・C塗りをはじめ、ロ、Cはすぐ止める。</p> <p>⑥イ、Dがまねして積木を動かす。E、部屋のスみにぶらさげてあって紙の下げカバンを「とってけい(とって下さい)」とたのむ。</p> <p>⑦イ、A、Bは果物に色を塗る。ロ、Aが「せんせ、これ塗ってけい」と塗りかけを渡して、Bも汽車ごっこへ行く。</p> <p>⑧A、また先生の所へ来て果物塗りをしている。</p> <p>⑨汽車ごっこでけんか発生。(お客が停車場で待っているのに止まらずに通り返す)</p> <p>⑩イ、「そうだね。」「お店やるか」、「せんせ、おれもう」、「多いいっちゃん、そんなに」、「兄ちゃんやっから」</p> <p>⑪「いいよ」A、Bのお店や、C、D Eはお客と役割が決まる。</p> <p>⑫B「おれ、おもちゃ」</p>	<p>たいこ 笛など</p> <p>果物の絵 ふちだ てか い</p> <p>カバン ひも</p> <p>あり合 せの玩 具</p> <p>お金</p>

「事例B」

教師の活動	幼児の活動	材料
<p>①「何しているの」と砂場に入る</p> <p>②砂をいじろうとする。</p> <p>③「あら、そうごめんさいね」としゃがんで見ている。</p> <p>⑦「ね、アーちゃん海へ行ったことある。海で砂遊びしたことある？」と男児に問いかける。</p> <p>⑧「あら、ガブガブってしゃべったでしよう？」</p> <p>⑨「そうね。だから浅いところでジャブジャブ泳ぐのね」</p> <p>⑩「それから砂遊びしたりするのね」</p> <p>⑪「波がザブンザブンくるでしょ。そこで穴を堀ったりトンネル作ったり。皆んなもするでしょ？」</p> <p>⑫砂場に入ろうとする。</p> <p>⑬サンダルにはきかえて砂場に入る。</p> <p>⑭如露で水をまく。「お水！お水！ホーラ、海の砂のようになったでしょ。お山を作ってもこれないのよ」</p> <p>⑮「ほら、こんな砂の方がいいでしょ」とぬれた砂を集める。</p> <p>⑯「これたいはくさん？ それともさおう？」</p> <p>⑰「うきとかめのお山？」</p> <p>⑱「あのね、兎と亀ここまでかっこしたのね」と頂上を示す。</p>	<p>①男児2、女児1、各々木片を片手で自動車を走らせたりしている。</p> <p>②女児「先生、手をつけないで」</p> <p>③女児何となく砂を握る。</p> <p>④男児が木片でその穴を埋める。</p> <p>⑤「だめじゃないの。こっちまでそんなにしないでいいでしょ」と女児が抗議する。</p> <p>⑥男児、知らん顔して同じ動作。</p> <p>⑦「ほく、海、行ったことあるよ。女児「あのね、すいかのボールで泳いだの。そしたら水のんじやった」</p> <p>⑧笑いながら「ウン」</p> <p>⑨イ、「あのね先生。浅い所の魚は食べられないよ」と男児「ロ、女児「深い所の魚、舟でとるのね」</p> <p>ハ、男児「深いところへいくと死んじやうよ」</p> <p>⑩うなづく。した「した」</p> <p>⑫女児「あら、先生上靴。だめですよ、砂場は外です」</p> <p>⑬男児「ザザ・ザブーン」と云いながら木片で砂をかき廻す。</p> <p>⑭砂をいじり始める。(ここで始めて手でじかに砂をいじる)</p> <p>⑮砂がバラバラになる。</p> <p>⑯一緒に山を作りはじめる。</p> <p>⑰「うん」「せんせい、もつと大きく」</p> <p>⑱「てっぺんに旗あるよ。探してくるからね」棒を持ってくる。</p>	<p>木片</p> <p>水</p> <p>水如露</p> <p>棒</p>

13イ、「ちよっと、ここにバナナはバナナって並べたら？の方がきれいでしょ」  
 ロ、箱を探して渡す。ついでにぶるね用の枕や花びんしきを座ぶると称して並べる。  
 14イ、「ごめん下さい。りんご下さい。いくらですか」  
 ロ、「はい、10えん、20えん、30えん、40えん、50えん。はい50えん、どうもありがとうございました。」  
 ハ、「もうし、これけさい。レモンけさい」  
 ニ、「それなんぼっしゃ」  
 ホ、「高いね。まけてけさい」  
 ヘ、「はい、20えん」  
 15「せんせいの所へ、お金持って買いきなさいね」  
 16イ、画用紙にぶどうを描く。  
 ロ、「これ何だと思う？」  
 ハ、「はい、50えん」  
 17「あんたはお店から買いきなさいね。」  
 18イ、いろいろな果物を描く。大きなすいかを描く。  
 ロ、にんじん、大根、ごぼうなど紙で立体的に作る。  
 19イ、「待ってね」とCをなだめる。  
 ロ、大きなすいかを描いて、A、Bに光る。  
 ハ、そのお金をCにやる。

13イ、C、D、E、ごちゃごちゃと果物屋に集まっていじり廻す。  
 ロ、「おもしろくない(面白くない)」とB、果物屋に転業。  
 14イ、B「そだ。箱けさい、箱」  
 ロ、「箱に入れっからね」  
 ハ、各々の箱に果物を入れて並べる。  
 15イ「50えんです」とA、B。  
 ロ、「もうし。これけさい。なんぼっしゃ」と買いくる。  
 ハ、A「レモン？」  
 B「レモンでこれね、これ、せんせ」  
 ホA、「まけっからね。せんせ、20えん」  
 ヘ、C、D、E各々「もうし。これけさい」と買物を続ける。  
 16イ、「せんせ、こっち売る物ねぐなつた」とA、B、が騒ぎ出す。  
 ロ、保育者から売った品物を買って、お店やごっこ続く。  
 17C「先生、おれにも」  
 18イ、「ウァーすいか」と幼児達、歓声を上げる。  
 19イ、Cのお金がなくなる。  
 20イ、C「お金、ねくなつた。ね」  
 ハ、「お金けさい」とA、Bに要求するが、A、Bはやらない。

箱、枕、花びん、しき

果物の追加

20「それ少し大きすぎるでしょ。もうちょっと小さいの」  
 21イ、ずいぶん固くなつたわね。もうくずれないわね」  
 ロ、「先生ごっこ」  
 22「あなたはそこね。それから先生ごっこ。いい？ そつとね」  
 23水を汲んでくる。  
 24一人遊びを始めた男児に、自分の場所をゆずってやる。  
 25「もう少し掘ってごらんないかい」  
 26「大丈夫、こうしてもう一度掘ればいいでしょう」と修理。  
 27「あのね、もうすこしぬれた方がいいのよ。お水汲んできましようね」と水を汲んできてバケツを置く。  
 28「ほら大丈夫でしょう」  
 29新しいグループにも水を汲んできてやる。  
 30「あの上手ね。前にも作つたことあるの」  
 31「ここにへいを作つて、そつちのトンネルとごつちをつなけるといいわね」と砂でへいを作る。  
 32イ、そばへ寄りながら「きつきも出来たんだから、ゆつくり上手に掘ってごらんないかい」  
 ロ、完成した方を指して「ほらあれみたい」

20細長い石を頂上に埋める。皆さん石で山を叩いてかためる。  
 21傍観者の表情、ますます真剣になる。  
 22「トンネル掘るからね」「ここから掘るから」「僕もこころ思いの位置から掘りはじめる」  
 23掘りはじめる。  
 24傍観者、靴を持ってきて砂場に入る。真剣な表情。思い直して見てみる。真剣な表情。  
 25男児山にかかる。思い直して砂場に出く。砂ますますしめる。  
 26イ、傍観していた男児、一人で砂遊びを始める。  
 27男児場所をゆずられて、トンネル作りに参加する。満足した表情。  
 28「先生、穴あかない」  
 29「ぼくがする」と手でジャブジャブと水をまく。山にかける。  
 30作り出す。  
 31貫通する「先生あいたよ」  
 32男児、更に砂場に3名入つてきつめるが止めて別に山を作り始めるが、砂場内に二つのグループが発生するわけである。  
 33イ、旧グループのトンネルを男児一人が最後まで残って貫通させる。「先生出来た」  
 ロ、「うん」

石

レコードが鳴り出して、部屋に入る時間を告げる。幼児達部屋へ入る。

バケツ

表 II

幼 児 の 活 動					教 師 の 活 動										
6	5	4	3	2	1	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
遊びを完成させる。(行為)	興味深い遊び方をする。(行為)	遊びの進捗を整える。 (行為及び言語)	新しい活動に興味を示す。	新しい活動に入る。(行為)	新しい活動を思いつく。 (行為及び言語)	次の活動を暗示する。 (行為及び言語)	幼児の希望を未然に察知する。	魅力的な材料に興味深げに示す。 (行為及び言語)	幼児を励まし賞める。 (表情、及び言語)	幼児の活動を技術的に援助する。 (行為)	幼児の第一線から退き、遊びをより深化させるための準備をする。 (行為)	発生した問題を遊びの中で解決する。 (行為及び言語)	幼児に親しいものを、遊びの中に積極的にとり入れる。 (行為及び言語)	遊びの進捗を整える。 (行為及び言語)	実際に遊んでみせる。(行為)
B A	B A	B A	B A	B A	B A	B A	B A	B A	B A	B A	B A	B A	B A	B A	B A
②⑤のイ	⑬⑭のロ	⑭のロ	⑩のハ、⑬のイ	⑦⑧	④⑤	⑥のハ	⑥のロ	⑩⑪	⑥のロ	④	⑬⑭⑮のロ	⑩⑪⑫⑬のロ	⑫⑬⑭⑮のイ、ロ	⑫⑬⑭⑮のイ、ロ	⑫⑬⑭⑮のイ、ロ
2	3	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2	4	3	2	2	1	2	2	5	4	3	2	5	2	4	7

活動の内容  
記 録  
計

める・「次の活動を暗示する」などが事例Aでは効果を挙げていない。これは、次のように解釈できるであろう。つまり、事例Aのように、遊びの経験に乏しく、遊び方を知らない幼児達に対しては、先ず遊び方を具体的に知らせるような活動が必要であり、ある程度の経験をしている対象に対しては、幼児自身から発生した活動を土台として、それを高めるための助力的行為が効果的なのである。

③問題解決の方法が幼児の活動を深化させるのに役立つ。

事例Aの「お店やごっこ」では、売り買いの進展に伴って一つの問題が発生した。即ち「お店や」側では「売り物」がなくなり、「お客」の側では「お金」がなくなってしまったのである。この場合、いろいろな解決の方法が考えられるであろう。例えば(イ)「売り物」と「お金」を相手に返させる。(ロ)「お店や」と「お客」の役割を換えさせる。(ハ)教師が新たに「売り物」や「お金」を作って材料の補給をしてやる。(ニ)幼児と一緒に材料作りをする。などである。

しかし、(イ)の解決法は、遊びをそのまま継続させるであろうが、このことがきっかけとなって、遊びに別の局面を展開させたり、遊びをより興味深いものにすることは出来ない。(ロ)は遊びを一時中断してしまう。(ハ)はもし役割の転換が混乱なく行なわれたとすれば、また一つの興味をひき起し得たかもしれないが、遊びそのものの流れから見ると、ちょっと不自然である。ここでとられている方法は、先生が作っている材料を「お店や」の主人達がたまったお金を持つて買いにくることによって「売り物」を補給するという方法であった。つまり、教師が「問屋さん」の役割をとったわけである。この解決法が幼児達の遊びに複雑な内容を与え、その活動を一歩前進させているし、幼児達の興味をも、より深めている。そして、それが遊びの流れを中断もせず、さらせもしないで、その流れの方向において流を、幅広く深いものとしているのである。



④教師の活動は幼児の主体性をもった反応との相対的な関係において成功する。

一見必要そうに思える教師の働きかけが功を奏さず、対象の上をただすべって通り過ぎてしまっている場合がある。例えば、事例Aにおける活動④、即ち教師が材料を出して幼児を誘って作り始めるが、幼児達はちょっと手を出しかけてすぐ止めてしまっている場合や、同じく活動⑥のイ、即ち積木で汽車ごっこをしてみせ、幼児がまねしてやり始めてすぐ止めてしまっている場合などである。これに比して、同事例の活動⑥のロ、つまり、「カバンをとってくれ」という幼児の要求に対して、「汽車ごっこするのね」と活動内容を暗示しつつその要求を充たしてやった場合は、その行為が対象児全員を積極的に汽車ごっこへと導入している。

「幼児の興味に基いた活動を展開させる」とは保育の根本的な原理の一であるが、実際的には幼児の興味を察し得ない場合もあるし、また、整えられた環境での保育経験に乏しい幼児達においては、その興味と自発性が、具体的な対象（活動或いは材料）に向けて発動され得ない時も多いわけである。このような場合、先ず幼児自身の興味を誘い出すための働きかけが必要であるために、教師がさまざまな「試みの行為」をしてみるわけであるが、その中で幼児の主体性を持った反応と、よくかみ合わされたものが、導入活動として効果をもつものである。

⑤適当な時機に教師は遊びの第一線から退くことが必要である。導入された活動を、幼児自身のものでして深化させるためには、これも根本原則の一つと考えてよいであろう。

#### ◆幼児の活動について

ある幼児の活動が、他の幼児を遊びへ導入する、また、その幼児自身を更に深く遊びへ入らせるきっかけとなっている場合は、この

事例では教師のそれほど多くはない。しかし、ここでも興味深い二、三の解釈が下され得るであろう。

①幼児自身が真剣に積極的に工夫して遊ぶ場合は、他の幼児をひきつけ、同時に自身をもより深いその活動へ没入させ得る。

事例Bで、既に遊びはじめた幼児達が砂山を築くことに夢中になり、更にその砂山の頂上に棒や石を立てるために工夫をこらし始めた時、傍観者の表情が真剣になり、のり出すようにその活動を見守り、とうとう一人で砂場のすみに入って砂をいじり始める場面が報告されている。更に、これらの行為は、この遊んでいる幼児達自身の興味をも益々その活動へ集中させ、より真剣に活動ととり組む意欲を起させる結果を産んでいるのである。

②構成的な材料を使用する場合は、完成に至るまでその活動が続けられることが望ましい。

事例Bのように砂遊びの場合は、一人の幼児がやりかけたことを完成した。即ちトンネルを貫通させた、ということが他の幼児を真剣にもし、工夫もさせて、トンネル作りに没頭させている。また、その幼児自身も、更に今一つのトンネルを完成させようと、より真剣に遊びを継続し、自由活動時間がきた時も、その活動に強い執着を示している。

これらの例は、着手させたことを完成させるような指導と助力が必要であり、また、それが可能な時間及び材料が与えられねばならないという、実際的な方針を示すものといえる。

#### ◆材料・その他について

①材料の魅力は、幼児自身の主体性をもった反応との相対的な関係において発揮される。

事例Aで、最初に提出された材料（画用紙の果物）は教師の予想を裏切って、余り幼児達の興味を引いていない。しかし「お店やご

「こ」が展開されてから、教師の補給する「大きなすいか」や「大根」などは幼児から非常な期待と歓迎をもって受け入れられている。また、「お店やごっこ」開始寸前に提出された「お金（牛乳びんのふた）」は、幼児達を遊びへ引き入れる導火線の役目を果たしている。材料の吟味が、単に材料そのものの価値においては独立してなされても意味がないことを、はっきりと示すものといえよう。

② 選ばれる活動と時機との関係は重要である。

事例Aにおいて「お店やごっこ」が選ばれたことは極めて賢明であった。即ち、次のような諸条件が「お店やごっこ」の展開に利していたわけである。(1) 雨の日であって、戸外の活動は不可能であった。(2) 保育開始後七日目で幼児達と保育者との結びつきも出来ていたし、保育所の生活に適応し始めていた。(3) 前日行なわれた「汽車ごっこ」が幼児達にとつて楽しい経験であり、当日も保育所で行なわれる活動に期待をもっていた。などである。このような時にタイミングよく提出された活動が効果的に幼児を引きつけ得たわけである。同様なことが事例Bにおいてもみられるであろう。

③ 活動の導入に際しては過去の経験が有効的に作用する。

事例Aで、幼児達は前日行なった「汽車ごっこ」へは強い興味を示しているが、新しく提出された「お店やごっこ」のとりつきには混乱がみられる。事例Bでは、保育者が海辺での砂遊びを想起させたことが、活動への導入をスムーズにしている。

これらの資料から、幼児達がその過去の生活の中で経験したことを土台として、それに関連をもたせ、新しい活動を誘導することの有効さに改めて気附かされるわけである。

④ 全体として、自由なのびのびした雰囲気の流れている。

幼児の活動自体を包む雰囲気的重要性はいうまでもないが、両事例とも、自由な活動の許される時間であり、場面であったというこ

と、そのような場で展開された活動であったことを再認識する必要がある。

——むすび——

「幼児の遊びを、表面的・形式的なものとなせず、より充実した、より豊かなものにした」とこれは私達の常に願っていることである。それは何らかの媒体による、巧みな誘導を必要としがちである。この誘導の過程及びその方法を探ることは、私達保育者に与えられた最大の課題といえる。この問題に対処する研究的な試みの一部として、ある活動へ幼児達が導入されていく過程を分析し、考察した。

資料としては、幼稚園現場で日常展開される保育の中での、成功体験の記録を用いた。これは前述のように、現場の経験例（特別に研究として計画されなかつた場合のもの）を、よりよい明日の保育のための資料として活用する試みである。

ここに引用したのは二例に過ぎないし、分析の結果見出された事例にも格別の新しさはないかもしれない。しかし、「私達が幼稚園の現場で、ある一日の保育を行なえば、それが一つの資料として蓄積されてもよいのではないだろうか、その研究的な処理をくり返すことによつて、実際のな保育の法則が導き出されてくるのではないだろうか」という私達のねらいの一端は示されていると思う。このような手続きを機会あるごとくり返すならば、そして、その一例ごとに導き出されたものを集大成し、体系化するならば、そこに動かして得ない方法上の共通原理と、対象の質に応じ、その時の条件に応じて変化する浮動的な原則とが、浮かび上ってくるのではないだろうか。体当り的な現場の生活と研究主義とを結びつける為にも、また、私達自身の毎日の保育を反省するためにも、このような試みを今後くり返し、続けていくつもりである。

# つたのみ日記 (その二)

坂元彦太郎



某月某日

かねてから、つくってもらって  
たコンクリート製のすべり台が、や  
つと出来上ったので、こどもたちが  
大喜びで、すべりまくっている。

お茶の水の幼稚園の前庭の正面にあるど  
てに、上り段とトンネルをコンクリートで  
つくり、それをくぐって上の段に上がり、  
それが、曲りくねって(？)下の段まです  
べるようにしてある。長さは、普通のすべ  
り台の三倍ぐらいもあるうか、コンクリー  
トのところは、クリーム色に染めてあるの  
で、上段の銀色に塗った鉄のさくともにも、  
あたりの緑の木々とうつり合って、とても  
印象的である。

長い間、工事中には近寄れなかったせい  
もあろうが、今日できあがったばかりのす  
べり台には、年長の男も女も、年少の幼児  
たちもまじえて、上り降りに大にぎわいな

のである。

見ていると、すべる姿勢なり、態度なり  
というものは、こどもによって大ちがいで  
ある。中には、腹ばいながらすべるのやら、  
バドミントンをおしりに敷いてすべるのや  
ら、いろいろある。さらに、頭を上腹ば  
ったり、からだを横にしてすべったりして、  
意地わるそうに見えるこどもたちもいる。

こどもたちが、おひるのべんどうのため  
に、室に引き上げはじめて、幼児の影が少  
なくなりかけたとき、ふと、私もすべって  
やろうと思いついたのだった。すばやく、  
あたりを見まわして、先生方の姿のないの  
を見さだめると、つかつかと石段をあがり、  
首をすくめてトンネルをくぐり、そして、  
すべり台の入り口に、立っている自分を見  
出したのであった。

「あら、先生もすべるの」  
と、残っていたこどもの声を耳にしなが

ら、私は、からだがちゆうに浮いたような  
軽さを感じた。からだは、すべり出して  
たのである。コースの曲り角のところ  
は、のぼしていた私の長い脚がつかえてし  
まったので、いそいで、脚をちぢめ、両腕  
で両脚を抱きかかえるようにしたら、また、  
ふわりとすべり出して、頬を通りすぎる風  
をたのしみながら、いちばん下まで、安着  
したのである。

ほんとに、久しぶりにすべったものだな  
と、すんでもなお、からだに残っている身  
軽な快さを味わっていたが、いちばん最後  
にすべったのは、いつだったか知ら、と考  
えはじめた。

とたんに、私はわからなくなった。私ど  
もの小さいときには、すべり台なぞはな  
かったし、そののちいつすべったことがある  
か、またはないのか、全く、ぼんやりして  
るのである。幼児の時のことなど、わかっ  
てるように思っても、ほんとは、こんな  
ことがあるのではないかな、と商売意識が  
出てきた。

× × × × ×

# 第十回教育実際指導研究会

幼稚園教育内容の研究——絵画製作の分野を中心として

主催 お茶の水女子大学付属幼稚園

幼児教育研究会

協賛 お茶の水女子大学

教育研究室・児童研究室  
付属小学校・中学校・高等学校

さわやかな若葉の候となりました。

本会も、今年で十回を迎えることになりましたが、年ごとの御好意と御鞭撻を深く感謝いたします。

わが国の幼児教育もますます盛になるとともに、すこぶる多事となりました。幼稚園教育要領についても反省の聲が高まり、近き将来において、改訂されるような気運もあるやに思われます。

このときに当り、本園のつたない實際指導を公開し、ささやかな研究を発表することも、なんらかの意義のあることと存じます。わけても、本年は、本会としてははじめて、絵画製作に関する分野に焦点をあてて、本園における実践の状況について御批判をいただくとともに、こうした分野についての、突っこんだ説明をもたすことに寄与したい、と念願して、左記のような予定を組みました。

本年も、多数の皆様の御参会を心からお待ち申しあげています。

なお、「幼児の教育」六月号を、本テーマによる特集として編集いたします。

日時 昭和三十六年六月二(金)三(土)四(日)の三日間

会場 お茶の水女子大学講堂

講演 講師

お茶の水女子大学教授 谷田 関次

家政学部教授 周 郷 博

お茶の水女子大学教授 坂 元 彦 太 郎  
兼 付属幼稚園長

協 議

「幼稚園における絵画製作の指導はどのようにあったらよいか」

お茶の水女子大学教授

周 郷

お茶の水女子大学助教授

津 守

お茶の水女子大学付属中学校講師

熊 本 高

お茶の水女子大学講師

林 健 造

お茶の水女子大学附属小学校教諭

坂 元 彦 太 郎

お茶の水女子大学教授  
兼 付属幼稚園長

坂 元 彦 太 郎

幼稚園・保育園・小学校の教育関係者及び一般希望者

三〇〇円（研究要項代を含む。当日お払い下さい）

五月二十五日まではがきでお申込み下さい

東京都文京区大塚町三五 お茶の水女子大学付属幼稚園幼児教育研究会

宿泊御希望の方は五月二十日までに申込み下さい。二食付六〇〇円ぐらいにてお世話いたします。

会 員  
会 費  
申 込 期 限  
申 込 場 所  
宿 泊

日 程 表

日		時	
6月4日 (日)	6月3日 (土)	6月2日 (金)	
実際指導ならびに 研究発表 協議	実際指導ならびに 研究発表	受付のつ 開会あい 実際指導ならびに研究発表	9.00
			9.30
			10.00
			11.00
			12.00
			1.00
			2.00
			3.00
			4.00

# 固定運動遊具のいろいろ

と

## その特徴

および

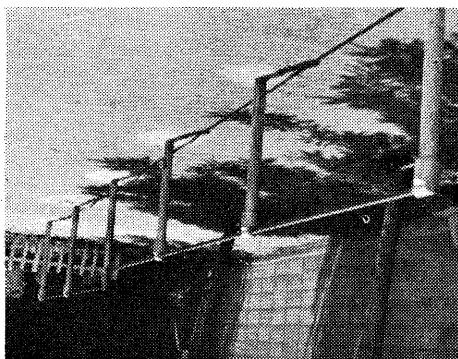
## 教育的意義

③

### 五、低鉄棒

これでの遊びは、懸垂運動が主であるから、先ず最初に挙げられるのが、腕の筋力の発達、続いて、胸筋、腹筋力の発達、さらに、巧緻性、手足の協応動作、平衡感覚、目まいに対する調整能力の発達など、多くの身体的価値とともに、助け合ってするか、研究心を起させるとか、勇気や決断力、自信を高めるとか、あるいは成功のよろこびを味わせるなど。知的、社会的、情緒的にも価値をもっている。

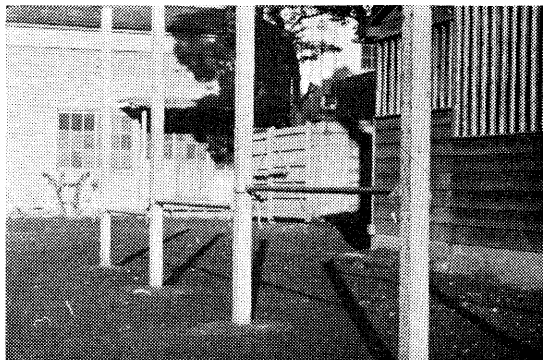
第 32 図 固定式低鉄棒



徳島市 助任幼稚園

調節式鉄棒は、千葉大学教授遠山喜一郎氏の考案したもので、その名の示す如く、調節自在。したがって、個人差の大きいこの期の子どもの一人ひとりの要求にあうことができ、きわめて便利。一欄で何欄もの役をすることができるのだから、現場の悩みを一度に解決してくれる遊具といえよう。

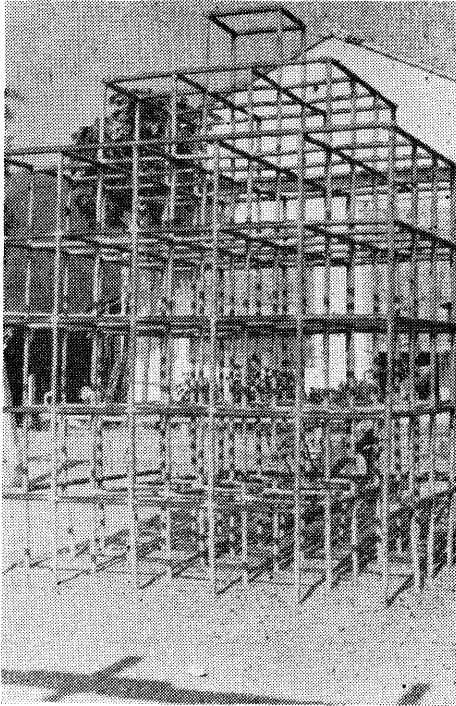
第 33 図 調節式鉄棒



武蔵野市 東京女子体育短大付属井ノ頭幼稚園

(美津農運動具製作所 本社 大阪) 支店 東京

第 34 図 ジャングル・ジム



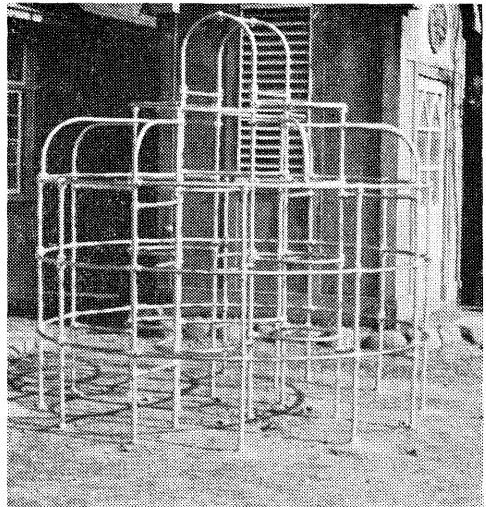
徳島市 加茂名幼稚園

六、ジャングル・ジム (Jungle gym)  
 この遊具は、登ったり、くぐったり、立ったりしてあそべるので、腕の筋力、手足の協応動作、あるいは柔軟性、平衡感覚などを発達させるといふ身体的価値とともに、大勢の仲間がゆずり合って遊ぶとか、あるいは優越感、征服感を満足させるなど、社会的、情緒的価値をももっている。

第 35 図 サーキュラ・キャッスル・ジム

サーキュラ・キャッスルジム (Circular-castle-gym) は、サーキュラ (Circular…円形の) どの語源の如く、普通のジャングルジムの周囲を円形にし、少し優美にみせてある。キャッスルとは、Castle (城、城郭、館) のこと。中央縦のくぐり穴も、花びらのように開いて、くぐり易くしてある。

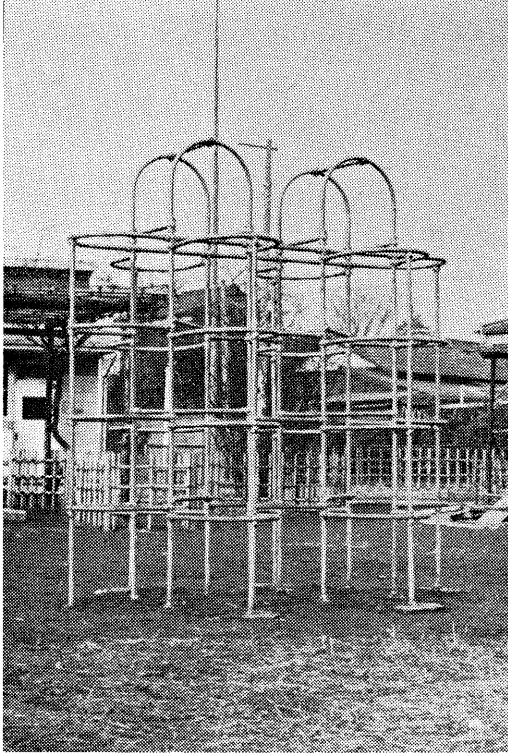
(フレーベル館 5 段式 ¥51,000円)  
 6 段式 ¥61,000円)



台東区 浅草 聖パウロ幼稚園

シングル・キャッスル・ジムは、サーキュラ  
 ・キャッスル・ジムの中央部を抜きとったの  
 と同じ。

第 32 図 ダブル・キャッスル・ジム

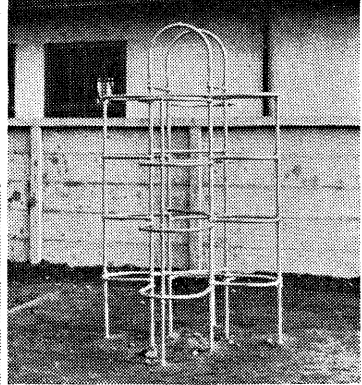


杉並区 杉並東洋幼稚園  
 (フレーベル館 ¥40,000円)

ダブル・キャッスル・ジムは、シングル・キ  
 ャッスル・ジムの、二つつき合わせたもの。

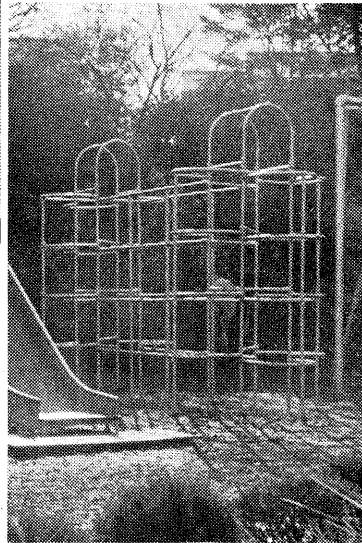
渡りキャッスル・ジムは、シングル・キャッ  
 スル・ジムの二つをつなぎ、その間を渡り遊ぶよ  
 うにしてある。

第 36 図 シングル・キャッスル・ジム



目黒区 恵泉バプテスト教会幼稚園  
 (フレーベル館 ¥23,000円)

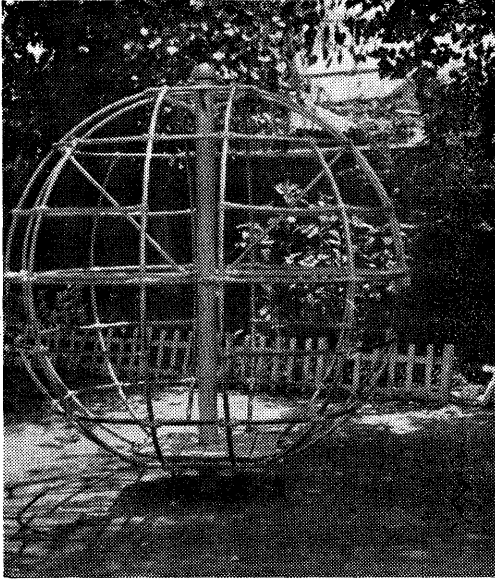
第 38 図 渡りキャッスルジム



お茶の水女子大学付属幼稚園  
 (フレーベル館 4 段式 ¥43,000円  
 5 段式 ¥52,000円)



第 39 図 グローブ・ジャングル・ジム

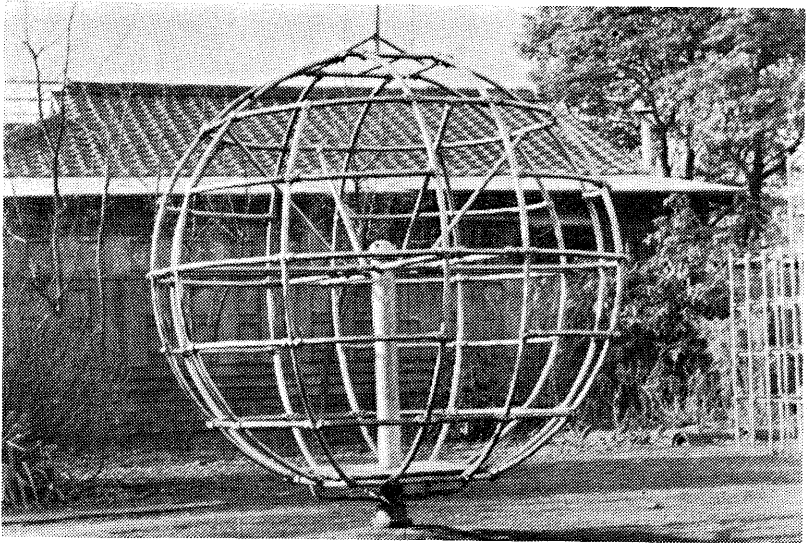


徳島市 助住幼稚園

グローブ・ジャングル・ジム (Globe-jungle-gym) 第 39,40 図は写真に示す如く、地球のようにまわく、しかも適当な速さで回るようになっているところから、グローブ (Globe…地球) なる語が生まれている。他のものと異なり、まわくて、動くので、遊びに変化があり、子どもたちの間では、動くジャングルとして愛好されている。

第 40 図は、軸が下半分。先端に棒が立っていて、つかまれるようになっている。

第 40 図 グローブ・ジャングル・ジム



代々木 初台 福田幼稚園  
(フレール館 ¥50,000円)

# 生活指導についての 一 考察

石川 春代

幼稚園でも、家庭でも環境を急速に理想的な環境に改めることは出来ない。しかも幼児達はこれらの環境に応じて行動をとるようになるので施設の不備を補うためには、適切な指導が工夫されなければならない。この点から、生活指導を幼稚園の指導内容の一項目である「遊びや仕事のきまりを守る」をとりあげて考察を試みた。

一、幼稚園のきまりは誰が作っているか。

幼稚園指導要領には、いろいろ

ろなきまりが羅列してあるが、それを、どのように守るかは教師がきめていることではなからうか。教師は一方的にきまりを強制していることはないであろうか。

○ 幼児にとって正しいきまりであるか否かは、幼児の実態から反省されなければならない。

二、五才児ほどの程度きまりが守れるか

○ 昨年行ったピアゼの道徳判断テストによって、幼児は、道徳的な判断では結果的な判断が多くなる行動と意識とがまだともなわれない。即ち原因、結果の思考はできないということがたしかめられたと思う。これはまた、きまりについていもいえると思う。

三、どんなきまりがあるか

教師のきまりは質問により、家庭のきまりは質問紙法により、子どものきまりは幼稚園、家庭とも話し合いにより調査した。

● 子どもが受けとめているきまりには、個人的に教師から注意をうけたことを、きまりと感じていて、それは、それぞれのできごと

によって、瞬間的にそのきまりを変えているようにも思えた。

● また集団生活することから起る問題解決や人と人との交渉によって起ってくる問題をきまりに考えている。即ち「人をたたかないこと」「人にいたずらしないこと」「人のじまをしらないこと」など。

このことから、幼児が何を訴えているか、教師が感じとる必要がある、幼児同志で解決できる方法を指導してやらなければならない。

どのように変っているかを次に考えてみた。

親の考えているきまりは、片付けが最も多いようで、親の考え方について、適当な方法を考え、幼児に適当な仕事であるか否かを考えることなしに片付けが取りあげられているようである。

● 幼児の受けとめているきまりについては、母親の注意がよく反映されているようである。母親の注意が、子どものきまりとして受けとめられているので、母親の感情

① 幼稚園におけるきまり

多い順	教師が考えているきまり	多い順	幼児が受けとめているきまり (幼児の話し合いにより)
1	片付けの合図で、みんなでは片付けない	1	遊んだ後、片付ける
2	廊下を走らない	2	けんかをしない
3	靴を下駄箱に入れる	3	砂や石をなげない
4	みまぐししないで、きまった道を通る	4	人にいたずらしない
5	幼稚園の門から出ない	5	水道の水をたくさんださない
6	大声でしゃべらないこと	6	机にのぼらない
7	机にのぼらない	7	扉にのぼらない
8	カバンや帽子をきまった所にかける	8	ブランコや遊具はかわりばんこにする
9	当番は机をふいて食事の用意をする	9	門から出ない
10	ブランコは、順番にのる	10	粘土積木椅子などなげない
11	信号をみて、道路を往復する	11	紙などちりさない
12	便所のきまものを揃える	12	カバンや帽子を自分の所にかける
13	手洗いや、うがいをする	13	靴は下駄箱に入れ人の靴をかくししない
14	用便は、便所でする	14	廊下を走らない
15	草や木、花を折ったりちぎったりしない	15	人にいじわるしない
		16	絵本をやぶらない
		17	砂を外にもち出さない
		18	先生の云う事を守る

② 家庭におけるきまり

多い順	親が考えているきまり (家庭調査により)	多い順	幼児がうけとめている きまり (幼児の話しあいにより)
1	遊んだ後や自分のものは自分で片付ける	1	お母さんに手伝いをせなさん使おうと
2	朝晩食事の前後来客ねるときなどのあいさつ	2	小使い
3	小使いを制限して無駄使いしない	3	自分でモックやカバンを片付ける
4	はやねい、はやおき	4	赤ちゃんを泣かすといかん
5	はやおき	5	あばれたり、さわいだりするといかん
6	食事前後に手を洗う	6	けんかするといかん
7	夕方五じ(六じ)に帰宅	7	けんかするといかん
8	外出するときは告げてゆく	8	自分のものや遊んだ後かたづけねばい
9	外出後うがいをししたり手足を洗う	9	お母さんの仕事のじゃまする
10	朝夕の挨拶	10	だまってお金をとるといかん
11	忙しいとき父母に手伝う	11	お母さんの云ったこと守らん
12	ねる前、歯みがきをする	12	お母さんといかん
13	他所からもらったものは家に告げる	13	お客さんが来たらさわいだらい
14	云われたら返事を	14	夕方早くかえらるといかん
15	食事前後の用意や片付け(九じまで)	15	障子やふすまをやぶるとい
	テレビについて(九じまでダイヤルなど)		野球するときにがらすをわるとい
			食事や用便後の手洗いを

※具体例について

四、幼稚園におけるきまりをどのようにして徹底させたらよい

か  
かいてあることは揃えやすいと言っている  
リッパの型を  
としては、ス  
たなくなるから  
としては、ス  
かいてあるこ  
とは揃えやす  
いと書いてい

① きまりに対する幼児の知識調査 (年長児、一年児、年少児、計 28 名の調査)

項目 具体例	よいと思う かわると思う うか	その理由	幼児の解決法
① 便所の うんこ かきこ る事 は	よい 28名	・きたなくなるから ・わからんごとなるから ・つぎのものがすぐきれいから ・片足ないとはいきんがつくから ・下におちるけん ・わからん	11・かいてある方がごちゃごちゃし ないからよい 13・そろえ易い 11・ぞうりは大事にしましょうとか 11・ぞうりとくとよか 11・男子はせと云う 11・自由だもい
② 砂場の 砂を 持ち出 さない	持ち出した らいけない 28名	・皆の眼に入るから ・誰のくつにも入るから ・砂場の砂がなくなるから ・片付けるときおそくなるから ・どうしてでん ・また持って帰しとくとよか ・おばちゃんの砂はもって来なは ・つら ・どろのまざるけん ・わからん	3・持たさないとい 14 2・また返しとく 1 1 4 1 1 1
③ 廊下を 走らな い	走ったら わるい 27名 走っても よい 1名	・ほりりがたってきたないから ・やかましい ・おじちゃんたちのおごらすから ・けがするけん ・お話しするときこえなから ・ねむるとときねむられんから ・人に迷惑かける ・身体検査のときははかれんから ・ころげるから	4 9 1 1 3 4 3 3 1 1 1 1 1
④ 机の上 にのら ない	机にのる のはわる い 27名 机にのっ てもよ い 1名	・机がきたなくなるから ・机をふかんなから ・机で御飯をたべるとききたない ・から ・行きがわるい ・ばいきんがお盆につく ・机の上に足かたがつく ・机がこわれるから	10 7 7 7 1 1 1 1
⑤ 靴を 下駄箱 に入れ る	入れるの がよい 28名	・くつがなくなるから ・間違えたりする ・わからん ・濡れらん ・痛れらん ・犬まわると行く ・ふくまれるから ・すく集れん ・ことなる	20 2 2 1 1 1 1 1 1 1

① 便所のはきものについては、  
● 便所のスリッパを揃えてぬぐこ  
児のきまりに出でてきている。理由  
としては、「わからんごとなる」 「き  
らが多かった。  
③ 廊下を走らない。  
理由としては、やかましいと言  
うことが一番多く、幼児なりにそ  
の解決法を考えている。これは教  
師のきまりとしては上位になっ  
ているが、幼児は、下位になっ  
て

きまりの具体例	教師の指導	幼児の反応	解決法	
家庭の協力によって	基本的な習慣などは主な要因である(省略)			
環境に順応させる(施設などの改修工夫により) 習慣形成によって徹底させるきまり	1 便所のきまりををる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・四月初「便所のスリッパを揃えてぬきましよう」とことばで指示した</li> <li>・五月中旬に便所の戸の前にスリッパの絵をかき、だまっていた</li> <li>・男児は下駄をのけて、せともの動かないものにした</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・幼児は時々ならべるが、すぐに見だれている</li> <li>・幼児は一所懸命にぞうりをならべている</li> <li>・いつもぞうりをならべるようになった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・環境を工夫改善することによって幼児はそれに順応する事で、きまりがスムーズに行なわれた</li> <li>・教師の具体的な指導が必要である</li> </ul>
	2 砂場の砂を持ち出さない	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昨年までは砂場の檻がなかった</li> <li>・五月中旬に砂場の檻をつかった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・幼児は砂をもち出して遊んでいた</li> <li>・幼児はころんで擦過傷が多かった</li> <li>・砂場の砂をもち出す子どもは殆んどなくなった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・砂場の檻を作ったので落付いた環境構成が出来、子どもはその中で、落付いて遊んでいた</li> </ul>
	3 廊下を走らない	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自由遊びの観察で</li> <li>・遊き室は走ってもよいときめる</li> <li>・他の室は走らないようにときめる</li> <li>・「人に迷惑をかけない」という集団生活をするうえに必要な刺激は与えなければならぬ</li> <li>・室の中で話しをきいているとき外を走って他の幼児達がとおると「ついでに年少児でも教師が前に立って「ついでに年少児でも教師が前に立って行動すれば」と指示する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・幼児は約束してごっこ遊びをし走って遊んでいる</li> <li>・幼児は実行する事は困難であった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・このような事から教師も共に幼児と実行する事が大切である</li> <li>・他の子どもを批判する事で意識を高めながら</li> </ul>
	4 机の上のぼらない	<ul style="list-style-type: none"> <li>・幼児が机の上のぼった時はすぐに机の上をふくように指示する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・幼児はすぐに実行出来る</li> <li>・また幼児同志でも解決出来るようである</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・幼児自身の体でつくのうことで、きまりを徹底させる</li> </ul>
	5 はきものを下駄箱に入れる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1週間の調査によると</li> <li>・室内の集りと園庭の集りをする</li> <li>・忘れた幼児の靴を教師がなおすようにした</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・同じ子どもが忘れている</li> <li>・室内の集りの時忘れていた子どもが多い</li> <li>・帰る時に幼児にさがさせる</li> <li>・1週間位で大体忘れる幼児がなくなった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個人的な指導が必要である</li> <li>・教師が忘れた幼児の靴をなおすようにするのは、幼児にただ注意するよりも効果があった</li> </ul>
子どものつくるきまり	6 遊びについて	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自由遊びの観察で</li> <li>・年長児</li> <li>・年少児</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>年長 <ul style="list-style-type: none"> <li>・9月16日おまつりごっこ</li> <li>① 材料を工夫</li> <li>② 場所をかえる</li> <li>③ 馬をつくるなど</li> </ul> </li> <li>・話し合いによって遊びが発展し、ルールが作られている</li> <li>年少 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ままごとから、どろぼうごっこなど、瞬間的に変っている</li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遊びについて、幼児が自由に作るきまりは、私達の指導法にとり入れて行かねばならない</li> <li>・幼児同志の公認は、遊びの中で重視されている</li> </ul>
	7 幼児自身のけんかの仲裁	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自由遊びのけんかについて観察すると</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・幼児同志で、力の強い子に訴えている</li> <li>・「口で云うといいじゃないか」と云って仲裁している</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教師の助言指導が、幼児同志のけんかの仲裁になっている</li> </ul>

### 五、幼稚園のきまりについての指導の実際(上表参照)

六、きまりについての教師の反省

- ・幼児は行動的な思考をし、動きながら考えるのであるから、教師は幼児と一しよに考える態度が必要であり、教師は具体的な問題に疑問をもち、幼児の生活の中から、問題を見出さねばならない。
- ・幼児自身が問題をみきわめ、自主的な行動の芽生えが育つように、そして自己中心的態度から成長させて、のぞましい社会的態度を身につけるよう、助力しなればならない。
- ・指導の実際例を出してみたが、実践してみて、その環境のみに順応させて、習慣化させようとした私の試みは、失敗であった。やはり同じ環境でも、幼児が新しい感じ方をするような指導が常に工夫されなければならないことを痛感した。

(熊本市立熊本幼稚園)

\* \* \*

# ヨーロッパの旅

平井信義

外国生活でノイローゼにかからないための予防法——このことについて私に忠告して下さったのはM氏である。M氏は五年余りのドイツ生活の中から、私の留学に当ってのはなむけとして、次の如く話されたのである。

「一つだけ、たとえばなしを申しませう。もしあなたがドイツ人の友人と一しょに下宿していただきます。そして仲よしになっても話し合えるというような……そういう間柄になつたとしましよ。しかしながら、あなたがかりに病気になるたというところがあつてもその友だちがその日にドイツの約束がしてあれば、自分のドイツを捨ててあなたを看病するようなことはない——と覚悟しておくことですね。その友人は、あなたによい病院を教えることはするでしよ。しかし、ドイツのためにでかけていってしまうでしよ」

日本人ならば、目の前にいて仲よくしている友人の病氣となると、ドイツの約束を捨てても看病をすることになるだろう。友人の不幸を自分も不幸として感じて、心からの看病をする人もあろうし、ドイツへの氣持から半ば離れられないままに、折角の日に

病氣なんかしてと友人の病氣をいまいましく思いながらも看病にも精を出すという人もあろう。また、病人には同情しないが、もし病人をこのままにして出かけたなら、これからの交際がうまくいかなくなるかも知れないし世間が承知しまい——ということでも、看病をする者もあろう。それが自己を満足させることにもなっている。いずれにしても、看病をしてくれることだけは期待できるのである。

しかし、それを期待したらドイツにおいては裏切られることがたびたび起こる可能性があるのだ。人に裏切られた時の淋しさはひどい。殊に異国においてはそうだろう。しかし、我が国で裏切られた——と思うようなことが、むこうでは普通だというのなら、裏切られたと感じたり淋しがったりするだけ馬鹿々々しい話となる。M氏の話をどのようにとつてよいのか、それがたとえ話であるだけに、私は「そんなものではすかねえ」と答えただけで、日本を出発してしまつたのである。

幸い私は病氣を一回もしなかつたので、病中の淋しさを味う機会はなかつた。しかし、フランクフルトからケルンに移り住み、

次いでO君が留学して来た時に、初めてM氏のたとえばなしに似たようなことが起きたのである。O君は、大学では私とは別の医局にいたので、昼飯の食堂で会う程度であったが、二三日彼の姿が見えないことがあった。どうしたかな——と思っているところへ、O君の下宿のおばさんから大学へ電話がかかって来た。O君がいま病気で、会いたいと言っているということであった。私は、とりあえずとんでいった。とり散らかした彼の部屋に入ると、熱がなかなかとれず、食欲がなくて困っている——と、彼は私の方に虚ろな目を向けて、大体の経過を報告した。

「いや、今度ばかりは参りましたよ。私の様子を知っていても、下宿の奴らは何一つしてくれないというわけでもなし、消化のいいものを——と行って頼んだところが、手伝いの人を備ったらどうか——って言いやがったし、あのクソ婆って思いましたよ」

部屋の散乱——シャツは脱ぎっ放し、タオルは椅子からずり落ち、発汗をふいたのか手拭が二つ三つ転っていたし、食べたものは喰い散らかし、——という具合で、三日間の彼の奮闘を物語っているようであった。

「日本だったらねえ——とと思いましたよ。下宿のおばさんが心配して、あれこれ面倒を見てくれるだろうし、入って来たらちょっとは片付けてでもくれるでしょうにねえ」と、彼は太い溜息をついた。たしかにそうだ、——殊に異国にいる人と思えば、その淋しきは身にしみてわかるだけに、日本の下宿ならば彼をこんな有様にしておくことは決してなかったろう。或いはうるさいくらいに面倒をみてくれるかも知れない。O君は、すっかりしょげてい

た。

それから三日間、私は彼のために薬を買ったり、消化によい食糧品を買って彼のために煮てあげたり、食べさせたりした。彼の病気は四、五日で恢復したが、それ以後の淋しきは一と入強くなったようであった。

下宿のおばさん——我が国では一種のなつかしい響きを持っていることばである。仙台にいた頃世話になった下宿のおじさんおばさんは、今は八〇歳を超えて元気でいるが、年に一〜二回は手紙のやり取りをしている。当時、嫁の心配までしてくれたおばさんであった。こんなことを思い出すと、ドイツの下宿のおばさんは、何と冷淡なのだろう——という気持が湧いてくる。しかし、本当にそうなのだろうか……。

第一、下宿という意味がちがうのである。我が国では、ここにかでも人間関係の存在が期待される。ところがドイツでは、部屋を貸し、その部屋に通ずる通路を通る鍵を与えてくれるのが下宿である。従って、一軒の家の一部屋であっても、我が国のアパートの一室の概念に等しい。貸してくれた人とは法的な契約だけで、人間関係を期待することはできないのである。O君の下宿のおばさんも、契約履行をしているのであって、それに人間関係を期待するのは、日本的な考え方を抜け出していない。第一、そのおばさんは自分の仕事を持っているんだ。だから、自分の仕事を裂いて彼のためにサービスすることは出来ない。親切の気持から、「誰か手伝いの人を——」と言ってくれたにちがいないし、それが精一杯の努力であったのだと思う。まして、他人の部屋を勝

手に掃除したり片付けたりできるものではない。仮りに時間があつてもそうしたことはしないだろう。

私は、M氏から聞いた話を、O君にも伝えた。しかし、日本から来たばかりのO君は、「ひでえ野郎どもだ」と憤慨しただけに終ってしまった。それもまた無理はない。三十五歳までじゅうぶんに日本の空気を吸ってきた人間が、直ちにドイツ人たちの間にある空気に馴染めるはずがないのである。また、我が国にみられる親切だって、どれだけ真実かわからない。ただ、そうした空気が存在するだけに、それを吸ったり吐いたりしてしまうのである。空気ということばが適当でなければ、日常生活の型とか、暮し方の型——というものがあつて、それに沿つて自分も行動し、その型を他人にも期待するようになるものである。

もし、そうした型を我が国から取り去つてしまえば、或いは多くの人がドイツ人のような行動をとるかも知れないのである。欧米人で日本へ来たことのあるものが、よく、日本人は親切だという。親しいなかななる迄もなく、一面識さえあれば親切にしてくれるという。ところが一方では、不親切だという声もきく。面識がなければ、例えば乗物の中であるとか道路などでは、すこしも親切にしないのが日本人——ということも言われる。面識ということが重要であるとすれば、それは或いは利害関係が裏にひそんでいような親切が多いのではないだろうか。乗物の中で、席を譲るのは主として知人である。少しでも自分の目上のものであれば、その人が若い男の人であつても席を譲るが、見知らぬ年寄りには席を譲らない——となると、日本人の親切には主として

面識が前提となり、その裏には功利的な気持が動いているのではないだろうか。

それよりも、自分の思った通りに行動すること——それは我が国ではドライと言われるかも知れないが、従来のうわべだけの人間関係を打ち破つて、新しい人間関係の型を生み出すには大切なことなのかも知れない。本当にその人のためのことを思つての行動——それが口先だけでなく、どの人のためにもそうした行動がとれるような立派なところの持ち主になることは大切なことであるが、それがうわべだけのこと、すなわち型だけのことであり、それは功利的に用いられ、親分子分とかそうしたものに発展していく可能性がある。

さて、我が国の両親にせよ保育者にせよ、子どもに対して、「他人への親切」ということを考えるときに、どのような意識を背景として、どのような行動を望んでいるのだろうか。自分のことを犠牲にして、内心はイヤだなあ——と思ひながらも、他人のためにあれこれと世話をやくようなことを求めているのであろうか。こうした行動は、今の年寄りたちには常識となっている。内心の思いを面に出すようなことをすれば、年寄りからは薄情な人間だと言われてしまうだろう。しかし、内心のイヤだなあと思う気持が強いときに、さも親切らしい行動をしたとしても、恐らく、内心の不快さをぬぐい切れずに悩むものも出てくるにちがいない。そうはいいいながら、自分がその立場におかれたら淋しいと思うことだろう——と考えると、些かの同情が湧いてくることだつてあるのだ。

こうした時に、どのように割切って行動するか、世間一般の型に従って行動するか、ドイツのような社会もあると思いきめて、自分の思った通りの行動に出るか、或いはその二つを超えた新しい方法を生み出すか……。親切にする——ということ一つをとってみても、おもしろい問題が横たわっているし、それらをどう考えるかによって、子どもの教育にも大きく影響してくるのである。

私自身、ドイツに生活していて、淋しい思いをしなかつたわけではない。いや、淋しい思いの連続であつたということもできると、急いで雨の降りだした夕方、家に帰るにも傘はなし——ということ、病院の玄関に立って両足を眺めていたことがある。そこへ、同じ医局でよく顔を合わせるエバーベック氏が通りかかつて言った。

「雨が降りますね？」

「急に降って来ましたね」

「ではさようなら」

「また、明日」

そして、彼は自分の自動車にエンジンをかけると、私に白い煙を見せたまま、乗り去ってしまったのである。日本でならなあ——という感傷が湧いてきたが、いやいや——と慌てて打ち消したのである。彼には、ちょうど時間でいかなければならない用事があるかも知れない。奥さんが食事の用意をして家で待っていることであっても、彼としては大切な家庭の営みを実現する上で必然的なことなのだ。或いは、どこかへ往診に行くのかも知れない。私の下宿まで——その下宿の場所を彼だつて知っているのだ

が——自動車ならば五分の距離であつても、彼にとってはその五分が大切なことなのかも知れない。或いは、「乗せていってくれ」と卒直に話をすれば、その気になったのかも知れない。乗せてくれと言う卒直さがなかつたのが悪いことだと言えれば悪いのだ——と私は考えた。彼自身としては、或いは、私が両足を眺めているその姿を尊んでくれたのかも知れない。

人の気持を汲んで——というのが我が国のつき合ひの方法である。それが先廻りしてうるさくなるのが非常に多い。客に茶菓をすすめた時、「もう結構です」と相手がいったとしても、本当は欲しがっているにちがいないと勘ぐるのが我が国の交際とか親切の型となっている。子どもが「もういらぬよ」と断つても、「そういうものではありませんよ」とその失礼をなじるのが母親であり保育者ではなかるうか。

私自身、西欧の社会で生活するうちに、他人を勧めることは少なくなってきた。そして、きれいなものを嫌いといい、雨の時に「乗せていって欲しい」というものを自動車にのせ、私自身も乗せて欲しい時にははつきりと「のせてくれ」といい、他人がその人の都合で行動すればその人の都合があるからと思う——そういうことが出来るようになってから、あとから、他人が勧めていたことを知ると、驚きもし、且つ何か悲しいものを感じるようになった。

新しい日本人の悩み——といったらよいのだろうか。そして、このことは、子どもの教育とか人間関係・精神療法などを考える上に、大切な要素だと思ふ。



# 日本幼児保育史の研究



## 日本保育学会共同研究小委員会

### 五、東京女子師範学校附属幼稚園（明治九年十一月）

東京女子師範学校（後の東京女子高等師範学校、現お茶の水女子大学）の附属幼稚園は、現存の幼稚園のなかでは、最も早くに設立されたものである。

その設立の経緯については、倉橋惣三、新庄よしこ共著「日本幼稚園史」および「東京女子高等師範学校六十年史」のなかに記されており、その後、新しい資料も見出されていないので、ここではその二書にあらわれたことを要約して、附属幼稚園設立の経過を示すことにする。

女子師範学校附属幼稚園の設立に先立って、女子師範学校が設立されているが、その設立の趣旨として、女学は幼稚教育の基礎であることがうたわれている。そして女子師範学校の設立が決定するの間もなく、幼稚園開設の計画が立てられているので、文部省で、女子師範学校を立案したときに、すでに、附属幼稚園のことが考えられていたと推察してよいと思う。そこで、以下に女子師範学校の設

立経過と併せて、附属幼稚園の設立の経過を、時期を追って挙げることにする。

明治七年

明治七年一月四日 文部少輔田中不二磨の名を以て、女子師範学校創立の伺書を、太政大臣三条美美に呈出。その伺書の中で、女子師範学校設立の必要の理由として、「女子ノ性質婉静蓄ニ能ク其教科ヲ講習スルヲ得ルノミナラス、向來幼稚ヲ撫養スルノ任アレバナリ」といっている。

（田中不二磨は、明治四年十一月より、明治六年まで文部省理事官として欧米の教育事情を視察した。その間に、女子の教育としての適性を感じ、女子師範学校の設立を企図するとともに、小学校および幼稚園を附属させる計画をもったらしい。附属小学校の開設は、幼稚園よりおくれ、明治十一年である。）

明治七年一月二十日

右の建議が認可された。

明治七年二月二十日

女子師範学校設立の布達が文部省から発布された。

明治七年三月十三日、神田区宮本町八番地「現文京区本郷湯島三丁

目二十四番地) 旧昌平蠻敷地が女子師範学校に宛てられた。

明治七年四月十四日 文部省八等出仕小杉恒太郎、女子師範学校長兼務を命ぜられ、本校創立の事を管理した。

#### 明治八年

明治八年二月二日 皇后陛下より御内庫金五千円下賜とともに、令旨あり、そのなかに、「女学ハ幼稚教育ノ基礎ニシテ忽略ニスヘカラサルモノナリ」とある。(宮内省記録)

明治八年七月七日 文部大輔田中不二磨の名で、太政大臣三条美実宛に、「幼稚園開設の儀の伺を出した。

明治八年八月二日 「伺之趣難聞候事」という達しがあり、許可にならなかつた。

明治八年八月二十五日 文部大輔田中不二磨の名により、幼稚園開設の儀、再応伺を出した。

明治八年九月十三日 三条太政大臣より、「伺之趣難聞届候事」という達しがあつた。

明治八年九月十五日 文部省から設立許可の布達があつた。

明治八年十一月十八日 校長小杉恒太郎退職して、中村正直新たに摂理に任せられた。

明治八年十一月二十九日 女子師範学校の開校式を挙行した。

明治九年六月一日 幼稚園保育の方法、並びに建物の設計などの相談があつた。

明治九年六月二十一日 第一回日本国婦人之会議が女子師範学校にて開催、関信三、中村正直らの講義が行なわれた。幼児教育に関する集会の始めである。

明治九年夏、フィラデルフィアで開かれた米國百年期、博覧会(The Centennial Exhibition)に、日本より恩物四十一種類を陳列した。

明治九年十一月六日 幼稚園園舎が竣工した。

明治九年十一月十三日 第二回日本国婦人之会議が女子師範学校にて開催され、関信三「幼稚園の説」、豊田扶雄「母親の心得」などの講演があつた。

明治九年十一月十四日 文部大輔田中不二磨代理、文部大丞九鬼隆一の名によって、幼稚園開設が一般に布達された。(文部省録事第五号)

明治九年十一月十六日 附属幼稚園の保育が開始された。監事(園長) 関信三、首席保母 クララ・ティーテルマン、保母 豊田扶雄その他

明治十年 明治十年十一月二十七日 幼稚園開業式が盛大に行なわれ、皇后宮と皇太后宮が行啓された。

開園当初の幼稚園は、有産階級、上流階級の子弟が大部分であつた。これは、当時、欧米風の進歩的文物が、上流知識階級の流行となつていたことによるものと思われる。

以上が女子師範学校に附属幼稚園が設立されるにいたつた経過である。ここに見るように、附属幼稚園の設置にあつては、次の点に注目すべきである。

一、女子師範学校創設の当初より、女子教育の目的の一つとして幼児教育が考えられ、附属幼稚園設置の気運があつたこと。

二、田中不二磨および中村正直の建議が大きな力をもつたこと。

「日本幼稚園史」によれば、幼稚園を設けることの最初の建議者が中村正直で、文部当局の理解者、推進者が田中不二麿である。先月号でみたように、中村正直は、明治四年に横浜に開かれた「亜米利加婦人教授所」における、婦人宣教師の幼児保育の考えにふれているから、早くより幼児教育に関心をよせていたといえる。（津守）

## 六、大阪府立模範幼稚園（明治十二年五月）

前述の東京女子師範学校附属幼稚園は、その前年開設された京都の幼稚遊藝場にくらべて、はるかに大きな影響をわが国の幼稚園史におよぼしたといえる。

毎日のように全国から多くの参観者が集まったといわれるが、そのうちのひとりであった当時の大阪府知事渡辺昇はこれを見て幼児教育の必要を認識すると同時に、これにならって大阪府にも幼稚園を設立しようとした。彼は知事になる前に弾正台忠という職にいたが、これは謀者のつくった報告をうけとる仕事である。また附属幼稚園の初代監事である関信三は、後に述べるように太政官の謀者であったために二人はたがいによく知っていたわけである。そこで渡辺が東京に来たとき、関をたずねて最近に設置された附属幼稚園の状態をみ、自分も大阪府の知事をしているので大阪にも同様に幼稚園をつくらうと思ひ、関に保姆の教育を依頼した。

その結果、渡辺は十一年二月に保姆見習いのためとして小学校訓導二名を東京女子師範学校におくり、同時に施設の準備をはじめた。この二人、氏原銀と木村末が見習いを終え、大阪に帰って幼稚園の施設や教具の準備をし、十二年五月開設のはこびとなったのが、

「大阪府立模範幼稚園」である。

氏原と木村が東京に行つて保育の実習をする様子については、倉橋惣三・新庄よしこ共著「日本幼稚園史」（一八一〜二二頁）に、「五十余年前大阪より保育実習の爲上京せし思出」として氏原銀の手記がのっている。

大阪府立模範幼稚園の設立の意図については、つぎに述べる愛珠幼稚園の「沿革誌」のなかに、この模範幼稚園のものであったと思われる「大阪幼稚園手引」が掲載されているが、これによって明らかである。この手引によると、模範幼稚園はつぎのように、現在の幼稚園と保育所の目的を兼ねており、フレールベルの考えにしたがい、家庭と学校の橋わたしをさせるところとして、模範となる幼稚園をつくらうとしていることが分る。

### 大阪幼稚園手引 明治十二年三月 大阪府学務課

#### 設立主意

世上ノ母トナル者其心必ス其嬰兒ノ成立ヲ欲スルハ人性ノ自然ニ出テ他人ノ教導ヲ待タスト雖モコレヲ愛撫養育スル法ニ至リテハ其欠クル所少ナカラス真ニ之ヲ愛スル者ハ其兒ノ身軀ヲ健固ニシ其兒ノ善心ヲ発動シ良知ヲ誘起スルニアリ然シテ幼児ノ家ニ在ル多クハ悪戯飽食習ヒ性トナリ却テ脆弱ナル身心ヲ損スル等比々是ナリ縦令其法ヲ知ルモ其母タル者或ハ家事ヲ理シ単ニ保嬰ノ法ニノミ従フコト能ハサル者多シコレ此幼稚園ヲ開設シ相比シタル幼児ヲ集メ其母ニ代リテコレヲ保育スル猶園丁ノ植物ヲ培養スルカ如ク和風麗日ニ其織マタル萌芽ヲ養ヒ其甘美ナル成果ヲ俟トニ俟タントス抑幼稚保育事業ノ法タルヤ西人

布列別氏ノ數十年間懇篤ニ發明シタル所ニシテ現今一般六七歳ノ兒女ヲシテ突然學ニ就ケ一時ニ其心ヲシテ激動強促スルノ弊習ナカラシメ僅ニ其ノ母親ノ懷抱ヲ脱シタルヨリ先ツ遊嬉樂事ヲ以テ其良知ヲ誘引シ自然學業ヲ愛好スルノ心情ヲ發生セシムルノ教ニシテ其幼稚ニ益アルヤ身體健康手芸熟練言語理論等ノ勢力ヲ發揮シ思惟力覺悟心ヲ練磨明亮ニシ平日拳動禮讓アリテ容儀溫雅ノ風ヲ蓄ヘ自ラ謹慎銳敏善ク物ニ堪ヘ博ク物ヲ識ラント欲スルノ念ヲ生ス右等總ベテ幼稚常行ノ範圍中ニ領取スル所ニシテ其ノ功妙實ニ不俟論ナリ今其管内ノ模範タルベキ一園ヲ設ケ以テ嬰兒教養ノ忽セニス可ラサルヲ世ノ父母タル者ニ示ス

(二十五、二十六頁)

またこの文章につづいて、「幼稚園手引」が載せられているが、これも大阪府立模範幼稚園のものであるように思われる。なお月謝は無料であった。

### 幼稚園手引

#### 第一条

一 入園セシムル幼稚ハ男女ヲ論セス年齢滿三年以上滿六年以下トス

但シ時宜ニヨリ滿二年以上ノモノモ入園ヲ許シ又滿六年以上ニ出ツルモノト雖モ猶在園ヲ許スコトアルベシ

#### 第二条

一 幼稚ノイマタ種痘ヲナス或ハ天然痘ヲ歴サルモノ及ヒ伝染スヘキ悪疾ニ罹ルト認ムルモノハ入園ヲ許サス且既ニ

入園スルモノト雖モ伝染病ニ罹ルトキハ快癒ニ至ルマテ来園スルヲ得ス

但シ毎月土曜日ニ医師ヲ招キ總テ在園ノ幼稚ヲ診察セシム

#### 第三条

一 園ノ幼稚ハ大約五十名マテトス

#### 第四条

一 幼稚ノ募集ハ予メ其期日員數等ヲ廣告スヘシ

#### 第五条

一 幼稚ヲ入園セシメント欲スルモノハ末段書式ノ願書ヲ以テ申出ヘシ

#### 第六条

一 園中ニ在テハ保姆一切保育ノ責ニ任ス故ニ附添人ヲ要セス

但シ幼稚未ダ保姆ニ慣馴セサル間或ハ幼稚自ラ該園ニ往來ナシ能ハサレハ付添人ニ出シテ送迎セシムヘシ

#### 第七条

一 園中ノ幼稚ハ年齢ニヨリテ之ヲ二組ニ分ツ

但シ滿四年以上ヲ一ノ組トシ滿三年以上ヲ二ノ組トス

#### 第八条

一 幼稚保育ノ時間ハ毎日四時間トス

但シ保育時間内ト雖モ幼稚ノ都合ニ由リ其旨ヲ申出テ帰宅スルモ妨ケナシトス

#### 第九条

一 幼稚在園ノ時間ハ六月一日ヨリ九月三十日マテハ午前八

時ヨリ正午十二時ニ至リ十月一日ヨリ五月三十一日マテハ午前第九時ヨリ午後第二時ニ至ル

第十条

一 年中休日ハ日曜日大祝日大祭日夏期七月十六日ヨリ八月三十一日マテ冬期十二月二十五日ヨリ一月七日マテトス但シ土曜日ハ半日トシ臨時休日ハ其時々揭示スヘシ

保育科目

第一 物品科

日用ノ器物即チ椅子机或ハ禽獸花果等ニ就キ其性質或ハ形状等ヲ示ス

第二 美麗科

美麗トシ好愛スル物品図画及ヒ彩色等ヲ示ス

第三 智識科

観玩ニ由テ智識ヲ開ク即チ図画物品及ヒ形体等ヲ示ス

右ノ三科色有スル所ノ子目左ノ如シ

五彩球ノ遊ヒ。木箸ノ置方。図画。計数。三形物ノ理解。環ノ置方。織紙畳紙。博物理解。貝ノ遊ヒ。剪紙木箸細工。唱歌。鎖ノ連接。剪紙貼付。粘土細工。説話。形体ノ積方。針画。木片ノ組方。体操。形体ノ置方。縫画。紙片ノ組方。遊戯。

ここで明らかなのは「幼稚園手引」が東京女子師範学校付属幼稚園のものト非常に似ていることである。

愛珠幼稚園の明治十三年に定められた手引についても同様のこと

第二ノ組 保育時間表

土	同	置箸法	同	同	同	同	同	同	從九時	從九時	同	同	同	同	同	同	同	同	同
									十分	十分									
同	同	同	同	同	同	同	同	同	至九時二十分	至九時二十分	同	同	同	同	同	同	同	同	同
									至十時	至十時									
同	同	同	同	同	同	同	同	同	至十時十分	至十時十分	同	同	同	同	同	同	同	同	同
									至十時五分	至十時五分									
同	同	同	同	同	同	同	同	同	至十一時	至十一時	同	同	同	同	同	同	同	同	同
									至十一時十分	至十一時十分									
同	同	同	同	同	同	同	同	同	至十一時十分	至十一時十分	同	同	同	同	同	同	同	同	同
									至十二時	至十二時									
同	同	同	同	同	同	同	同	同	至十二時十分	至十二時十分	同	同	同	同	同	同	同	同	同
									至十二時五分	至十二時五分									
同	同	同	同	同	同	同	同	同	至十二時十分	至十二時十分	同	同	同	同	同	同	同	同	同
									至十二時五分	至十二時五分									
同	同	同	同	同	同	同	同	同	至十二時十分	至十二時十分	同	同	同	同	同	同	同	同	同
									至十二時五分	至十二時五分									
同	同	同	同	同	同	同	同	同	至十二時十分	至十二時十分	同	同	同	同	同	同	同	同	同
									至十二時五分	至十二時五分									
同	同	同	同	同	同	同	同	同	至十二時十分	至十二時十分	同	同	同	同	同	同	同	同	同
									至十二時五分	至十二時五分									
同	同	同	同	同	同	同	同	同	至十二時十分	至十二時十分	同	同	同	同	同	同	同	同	同
									至十二時五分	至十二時五分									

第一ノ組 同

土	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

が言えるが、初期の公立幼稚園は、東京女子師範学校付属幼稚園を  
手本としこれにならったものが多い。

しかし、その「設立主意」のなかで

「然シテ幼児ノ家ニ在ル多クハ悪戯飽食習ヒ性トナリ却テ  
脆弱ナル身心ヲ損スル等比々是ナリ縦令其法ヲ知ルモ其母タル  
者或ハ家事ヲ理シ単ニ保嬰ノ法ニノミ従ハサル者多シコレ此幼  
稚園ヲ開設シ相比シタル幼児ヲ集メ其母ニ代リテコレヲ保育ス  
ル——」

と述べていることは、東京女子師範学校付属幼稚園のばあいとくら  
べて、興味がふかい。

この「設立主意」にみられる意気ごみは、当時の文部省年報およ  
び大阪府年報に、つぎのように述べられていることから察するこ  
とができる。

「——小学校ノ教育略其地歩ヲ占ムルヲ以テ更ニ幼稚保育法ヲ  
布ク 其法ハ東京女子師範学校付属幼稚園ニ取リ其保育ノ法及  
ヒ室内ノ構造等ハ一層コレヲ精密ニシ遊園遊戯ノ室ニ至ル迄コ  
レヲ完備セシメリ 蓋シ此園ヲ以テ府下ノ模範トシ各部ノ間ニ  
多クノ幼稚園アラシメシカ為ニ傍ラ保姆練習ノ科ヲ置キ他園ノ  
保姆タル可キ者ヲ養成セリ」

(文部省 第七年報 大阪府年報)

以上のように、大阪府立模範幼稚園は、阪神地方における最初の  
幼稚園として、他園の開設の土台になろうという意図がみとめら  
れ、保姆の養成もこころみていたことがわかる。

この辺の事情について古木弘造は、つぎのように述べている。

このようにして大阪に於ても幼稚園が開かれることになった  
のであるが、既にこの時、府下の模範とし各都区に於ける幼児  
教育の根柢たらしめようと、保姆の養成を試みると共にその  
設備や保育の実際にも完璧を期したのである。即ち建築物、庭  
園等とはより、教具遊具等迄すべて東京より見本をとり寄  
せ、大阪商人に模造させ、更に額面、動植物の標本等をも整  
え、又熟練なる保姆とも用意して出発したのであった。

(「幼児保育史」 五十三頁 昭和二十一年巖松堂書店刊)

模範幼稚園の設備については、「日本幼稚園史」に氏原が創立当  
時を回想して手記をのせているが、これによると次のように、動植  
物の標本やおもちゃなどをならべて娯楽室をもうけており、日本  
全地形を模した庭園をつくっている。

幼稚園用具机腰掛恩物等の凡ての見本を東京より取り寄せ、大  
阪商人に模造せしむ。此園舎は北区中之島府立中学校の一部を改  
造し、其床面には布を張り、白色ペンキ塗りの上へ赤緑で牡丹の  
大形を描き、又絨氈敷の一室に衣食住状態の額面十余枚を掲げ、  
陳列用硝子棚に動植物の標本玩具等を排へて観玩に供し、園内唯  
一の娯楽室とす、其庭園日本全地形に象り、即ち本土九州四国北  
海道佐渡臺岐対馬小笠原島諸島等は小山を以てあらはし、中国四  
国の間を池として金魚を放ち、此庭の造り方は其意味は幼児に解  
し難く不向なりしが、其低く長く延びたる小山を、自由に上下  
し、又其上をかけ廻りて、楽しくよく遊びたりし、其他藤棚、広  
き芝生あり、幼稚一人用の小畑あり、花壇に代用す。以上の設備  
で明治十二年五月、大阪府立模範幼稚園と称し開園す、これ我が

国の第二番目の開園なり。

(一三八—一三九頁)

なおこの幼稚園は、四年後の明治十六年には廃園のやむなきに至ったが、その影響は来月号で述べる愛珠幼稚園や中洲幼稚園を通じて多くの幼稚園におよび、関西保育界の草分けとなっている。

このことについて、氏原銀は文章につづいて次のように述べている。これによると、知事の変ったことが廃園の大きな原因とみられ、鹿児島幼稚園とともに知事のちからがはずかって大きかったことがうかがわれる。

此園は僅か四年にして発園の不運となれり。此原因は未だ時期の早かりしによるものならんか、府会議員の幼稚園を理解するもの少く、為めに賛成者少数にて、終に否決なりしものにて、実は二年前に発園となりたるものなれど、府の当局者の惜しみて府の準備金の利子を以て維持来りしもので、時機あらば発園せんとの折柄、東区愛珠幼稚園の大に發展し、創立三週年の記念祝賀祭を盛大に、明治十六年五月挙行の時、当時の知事建野郷三氏臨場、此の愛珠園の盛況あるに於いては、府立園を置く必要なしとの意見で、突然同年六月十四日発園の命下り、大に驚き落胆万々なりし、此時愚痴をこぼして思へるは、此府立園設立当時の知事渡辺昇氏の在職せられたらんには、一旦府会で否決せし幼稚園案を更に府会に提出せられたらんものをなとど、かこちたりし。

(一三九頁)

(村山・豊田)

## 七、木町通小学校附属幼稚園 (明治十二年六月)

明治十二年には、大阪のほかに、遠く離れて南は九州の鹿児島と北は東北地方の仙台に一つずつ幼稚園ができています。

初期の幼稚園の特徴として、非常に熱心な人があらわれ、これが適当な保姆を得て、やっと幼稚園というものをつくりあげるが、当時の人びとの無理解がもとで経済的な困難におちいり間もなく廃止される(または経営者が変わって変遷する)という傾向がみられる。その傾向の典型的なものとしてこの木町通小学校附属幼稚園があげられる。

明治六年七月に仙台市の東二番丁に民家を校舎にあてて、二番丁小学校が開設された。この学校は翌年一月には東二番丁小学校と改称され、八年には養賢小学校となり、十二年には東二番丁小学校と称されている。これが市の中心部にある現在の東二番丁小学校の前身、当時は現在の位置より少し東である。この小学校に十二年六月七日に矢野成文という熱心な人によって附属幼稚園がつけられた。これが木町通小学校附属幼稚園であった。

しかしその当時、仙台は東京、京都、大阪などと違い、幼稚園ができるような文化的素地があったわけではなく、むしろここにこんなに早く幼稚園がポツとできたのが不思議で、この幼稚園も公立として予算を維持するだけの理解はなかなか得にくかったとみえて、経済的な困難をたえずなめている。

この間にあつてこの幼稚園の維持のために東奔西走して寄附をあつめるなど献身的な苦勞をした人に矢野成文がある。矢野は仙台伝

習学校を卒業し、小学校の訓導をしていたが、附属幼稚園が作られるや、その主任となった。

この木町通小学校附属幼稚園は創立の翌年には早くも小学校の所管を離れて仙台幼稚園となり、廃止されたり再興されたり、私立にったり公立にったりして変転きわまりないが、この幼稚園を京都の幼稚遊戯場のように廃絶にいたらしめなかつたのは、氏の努力によるところが多い。

すなわち宮城県で古いと言われる「宮城女子師範学校附属幼稚園」でも、これができたのがそれから六十年ほど後のことである。

この県立の幼稚園は創立が昭和十年であったのにもかかわらず、幼稚園をつくろうというような運動やうごきがあつたわけでない。仙台ではその当時幼稚園は軽視されていた。軽視されていたというよりも認識されていなかった。(附属幼稚園遠藤浜子先生談)

また隣りの岩手県でいちばん古い幼稚園は明治四十三年の盛岡幼稚園である。

実際この幼稚園を村山が調査に行つたときも、東二番丁小学校の先生がたは、そんな古い幼稚園はない、うちの幼稚園は明治でなく大正五年に創設されたものであるという話であつた。(大正五年に東二番丁尋常小学校の附設となつてゐる。)

またこの幼稚園の後身である仙台東二番丁幼稚園は、昭和二十九年に復興されたものの、このときPTA立となつてゐる。園舎はまったく小学校の敷地のなかに、小学校の校舎につづいてあるのにかかわらず、PTA立となつてゐるが、これなども市の予算が思わしくなく、そのうえ建物をPTAでたつたので、市の方ではこういう建物はいらぬというわけで私立になつたものであり、こんなところ

からも、名門であるこの幼稚園の苦しかった過去がなんとなく想像される。(佐藤豊先生談)

以上のように幼稚園にたいする無理解な一般のふんい気のなかにあつて、幼稚園の維持に矢野園長の努力が大きかつたことが考えられるが、このほか保母橋本よしぢの功績も大きかつた。

橋本は仙台師範学校を卒業後、東京女子師範学校附属幼稚園保母練習科を卒業し、明治二十五年七月五日に保母(当時、資格と職名には、保母・保母雇・雇があつた)として就職してゐる。そして三十年十一月には園長事務取扱となり、昭和七年に退職するまで五十年以上の長きにわたつて、その功績が大きかつた。

なお、この幼稚園は、明治十一年十月に仙台区が置かれてゐることからみて、十二年の創設当時は区立であつたように思われる。

「沿革史その一」(東二番丁小学校所蔵)によると、明治十九年十二月には保母三名、幼児七十八名となつてゐる。ちなみに、そのとき小学校の日日の出席生徒の人数は千百余人である。なお十九年の幼稚園の施設は平屋一棟七十二坪である。二十二年、二十三年には「幼児遊戯会」を催してゐる。また二十四年には、西歴一八八九年の仏国巴里万国大博覧会からこの幼稚園にたいして賞状と銀牌がおくられてゐる。

参考までに東二番丁小学校に所蔵されてゐる東二番丁国民学校附設幼稚園の沿革史をあげると、つぎのようである。

#### 沿革史 東二番丁国民学校附設幼稚園

明治十二年六月七日

仙台市定禪寺通三番地ニ開園。木町通小学校附属幼稚園ト称ス。



〈日本幼児保育史の研究〉

仙台傳習学校卒業訓導矢野成文之方主任タリ。

明治十三年十月

木町通小学校ノ所管ヲ離レテ、独立シ元鍛冶町一番地ニ移転シ

仙台幼稚園ト称ス。矢野成文園長タリ。

明治十五年九月

仙台区会ノ決議ニヨリテ廃止セラレ、同年十一月再興ス。

明治十六年七月

仙台区会ノ決議ニヨリテ再廃止セラレ。矢野園長ノ辛苦ニヨリ私

立幼稚園トシテ繼續經營ス。

明治十九年十二月

仙台市東二番丁尋常高等小学校敷地内ニ移転シ、高等小学校附属

幼稚園ト称ス。移転ニ際シ矢野氏東西奔走幼児保護者及有志者ノ寄

附シ仰ギテ民家ヲ購入シ以テ園舎ニ充ツ。移転後東二番丁小学校長

訓導真山寛園務ヲ管理ス。

明治二十九年四月一日

東二番丁小学校ノ所管ヲ離レテ独立シ、仙台市幼稚園ト称シ宮城

県尋常師範学校卒業訓導原通園長事務取扱トナル。

明治三十年十一月十五日

仙台師範学校卒業東京女子師範学校附属幼稚園保姆練習科卒業橋

本ヨシヂ園長事務取扱トナル。

明治三十一年四月

従来ノ保育室ヲ増シテ四組トス。

大正五年四月

仙台市立幼稚園ヲ東二番丁尋常小学校ノ附設トス。

大正十五年四月二十二日

幼稚園令改正（勅令第七十四号）ノ結果保姆免許状新ニ交附セラ

ル。  
昭和三年九月十一日

本校講堂新築ノタメ従来ノ園舎ノ取り払ヒ本校ノ唱歌室ニ移転

ス。

昭和四年十一月二十三日

創立五十週年記念式ヲ与ウ。

昭和五年十一月二十二日

橋本保姆功績頗ル顯著ナルノ謂ヲ以テ全国保育大会々々長ヨリ表彰

セラレ功牌ヲ贈ラル。

昭和六年四月十日

校長梅良造退職

昭和六年四月十二日

本県女子師範学校教諭二階堂清寿校長就任

昭和六年五月一日

園児ニ牛乳配給ヲ始ム。

昭和七年三月三十一日

保姆橋本ヨシヂ五十有余年奉職タリシガ此ニ退職

昭和七年八月三十一日

高野静江主任保姆ニ就任

昭和七年十二月十日

仙台市保育会創設

昭和八年六月七日

母ノ会創設

昭和十年八月九日

幼稚園移転改築期成会成立

昭和十年九月二十三日

母ノ会主催ニテ第一回期成会後援バザール開催

昭和十一年五月二十四日

第二回後援バザール開催

昭和十二年二月十一日

穂積保母教育功勞者トシテ、市長ヨリ表彰セラレル。

昭和十二年五月二十三日

第三回後援バザール開催

(昭和十三年から十九年まで筆者省略す)

昭和二十年七月六日

戦局我レニ不利ニシテ日本国土ノ重要施設並ニ地域諸々大空襲ヲ受ク為ニ当園ハ暫時休園トナル。

昭和二十年七月九日

午後十時頃ヨリ翌朝午前二時半迄仙台一園大空襲ヲ受ク敵機数百機ナリ、我園モ本校ト共ニ建物備品ノ全部鳥有ニ段スナレド御真影並ニ勅語贈本等ハ御安全ニマシマス。又重要書類ハイチ早く馳ケ付ケタル加茂、館ノ両保母ノ手ニヨリ無事死守セラレタリ。(園籍、卒業台帳、図書の一部等)

昭和二十年七月

本校並ニ附設幼稚園ハ建物全焼ノタメ一時片平校ニ移ル本校ノミ仮校舎ト定メテ授業ヲ初メル。

昭和二十年八月十五日

戦争結結ノ大詔喚發セララル正午校長ヲ初メ職員謹ンデラジオヲ通シ玉音ヲ拝承ス。

昭和二十年九月十五日

連合国我が仙台ニ初ノ進駐ヲ行フ。

昭和二十年十月三十一日

本日限り廃止

(村山)

お知らせ

### 日本保育学会第十四回大会

会期 五月二十・二十一日(土・日)

会場 お茶の水女子大学

連絡先

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学

日本保育学会第十四回大会

準備委員会

(941) 〇一四一 児童科

### 幼児の教育 第六十巻 第五号

五月号 ◎ 定価六〇円

昭和三十六年四月二十五日印刷

昭和三十六年五月 一日発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

編集兼 津 守 真  
発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五

印刷所 凸版印刷株式会社

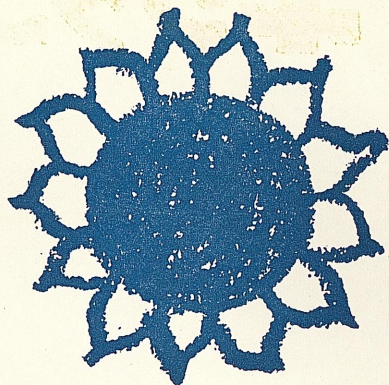
東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

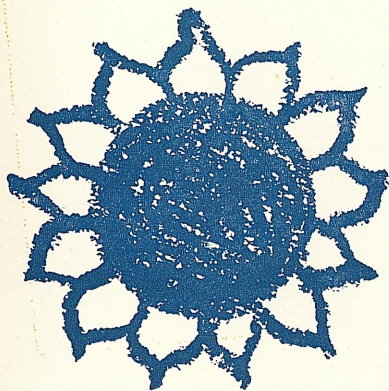
◎本誌ご購入についてのご注文は発売所 フレーベル館にお願いたします。

みんなで  
うたい  
ましょう



## 母とおさなごの歌

編集／東京都私立幼稚園協会



幼児向のやさしい歌ばかりです。  
手軽に持ち歩くことができます。  
季節の歌、そのほか内容が豊富で  
す。  
家庭でのだんらんに、園でのだん  
らんにきとお役に立ちます。

発売／フレーベル館

新書判72頁 定価50円園納45円

古い歴史と新しい編集の観察絵本

# キンダブック

—第 16 集 第 3 編 6 月号予告—



☆お子さま方の感情と知識を

豊かに育てる絵本☆

A4判 16頁  
毎月付録付  
定価五十円

## 《六月号内容予告》

かえる

☆すいれんと かえる え・吉沢廉三郎先生

☆いけの そこを のぞいてみましょう  
え・川上四郎先生

☆おたまじゃくしを かいましょう  
え・林 義 雄先生

☆かえるの いろいろ え・清水 勝先生

☆かえるの うた え・清水 勝先生  
詩・まこと・みちお先生

☆かえるの うんどうせんしゅ  
え・初山 滋先生

☆かえるの おんがくか  
え・武井武雄先生

☆うしと かえる  
イソップ より  
文・与田準一先生

☆きょうの かえる おおさかの かえる  
え・センバ・太郎先生

☆たのしい おもちゃばこ  
日本民話 より  
文・浜田広介先生

☆おちやめの ちびぞう  
え・鈴木寿雄先生

☆おちやめの ちびぞう  
文・飯 沢 匠先生

☆おちやめの ちびぞう  
え・土方重巳先生

別冊付録「つばめの おうち」  
文とえ・和田義三先生

工作付録「ふりこどけい」

東京都千代田区 株式  
神田小川町3の1 会社

## フレール館

電話東京 (291) 7781~5  
振替口座 東京 19640 番